
ソードアート・オンライン ~天翔る竜騎士~

U,T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン ～天翔る竜騎士～

【Nコード】

N3228W

【作者名】

U・T

【あらすじ】

”HPが尽きる”。それが真の”死”に繋がる世界へと成り果てたVRMMO——《ソードアート・オンライン》。その世界の中で唯一人、地に縛られぬ力——《飛翔^{ジャンプ}》を得た青年「カイン」。

これは後に”竜騎士”と呼ばれた彼の、知られざる物語である——。

prologue (前書き)

どうも、お初にお目に掛かります。駄文体现者ことU・Tです。
誤字脱字が結構多く、また打ち間違いも多々ある駄作者です(汗

SAO本来の設定と私のオリ設定を含めた感じに書いて行こうと思
っております。

オリ設定と言っても、作者が以前プレイしていたMMORPG『F
AINALFANTAGY??』の設定をアレンジしたのですがW

ともかく、本編スタートです。

prologue

——《アインクラッド》の何処かに存在する特定の場所に立つと、不意に謎の声から問い掛けを受ける。その問いの答え方次第で、そのプレイヤーは謎の声の主と闘い、勝利を得た暁には”地に縛られぬ強き力”が与えられるだろう。しかしその声の求める答えを出せなかった者は声の主の怒りを買って闘えず、絶望を味わうだろう——

2023年5月頃、丁度最前線・第25層で《軍》の精鋭が大被害を受けた頃と同時期に、大勢のNPCがこの話を呟いていた。この話を聞いたプレイヤー達は一瞬にして理解する。「これはクエストだ」と。

すぐさまプレイヤー達はこの”謎の声”が聞こえそうな場所を虱潰しに搜索し始めた。フィールドの奥地、山の頂上、ダンジョンに配置された洞窟の奥底等々……有志あるプレイヤー達は数週間に渡っても尚諦めずに搜索し続けた。HPバーが尽きる事が”死”であるこの世界——《ソードアート・オンライン》^{ゲーム}においての力とは、即ち生きる為の力と同義。強き力に飢えるのも無理はなかった。

しかし遂にその場所が発見される事は無く、一時期毎日の様に噂していたNPCも普通通りの会話に戻っていた。クエストの発生期間が終了したのだと理解したプレイヤー達は無駄労力に汗を流した事に落胆しつつも、再び己の道を進み始めた。

だがそれから数日が経った時、ある一人の青年が二十三階層に存在する《忌々しき峡谷》でその謎の声の問い掛けを受け、正しき答えを返答、そして見事勝利する事に人知れず成功していた。

勝利によって齎された肝心の”地に縛られぬ強き力”とは《ユニクススキル》の事であり、彼が得たスキルの名は《飛翔^{ジャンプ}》。超人的な跳躍力で空を跳び、頭上から襲い掛かると言う姿は、古い昔からRPGで存在した高く跳び上がり攻撃する『竜騎士^{さま}』の様を髣髴とさせた。

彼が確かな情報を持って《忌々しき峡谷》に向かった訳ではなく、モンスターの遭遇率^{エンカウント}が高いこの場所でレベル上げをしていて、夜になつた為街へ戻ろうとした瞬間に謎の声を聞いたそうだ。

丁度青年が立っていた場所がダンジョンの奥地であり、時刻は夜中12:00丁度。

恐らくこの場所・この時間帯が条件だったと思われるが、それを知らずに満たしてしまった青年はかなりの幸運の持ち主だと言わざるを得ないだろう。

青年が出会った謎の声の主は——飛竜^{ワイバーン}だった。

しかしその躯体は迷宮区のボスモンスターで出現してもおかしくはない程巨大で、レベルは二十五層だと言うのに軽く60は超えていたらしい。

彼は問い掛けに答えたのは良いものの、現れた飛竜の余りのレベルの高さに一度は逃亡の選択肢を選ぼうとしたが、意を決してその飛竜に闘いを臨んだ。

しかしそれは、無謀にも等しい行為。

当時最前線に立つプレイヤーと同等のレベルだった彼でもレベル60越えのモンスター、付け加えパーティを組んで挑むのが基本な

フラグMobに対してたった一人で闘うのだ。余りにも危険過ぎている。

自慢のソードスキルも飛竜の抜群の回避力には敵わず、また一定時間経つと共にHPが僅かに回復する《バトルヒーリング》も持ち合わせていた為、時と共に青年の方が不利になるのは当然の結末だった。

飛竜が放つ攻撃も容赦なく、広範囲のプレス攻撃や突風、両翼での突撃等、苛烈な猛攻が彼のHPバーを奪い続ける。一步油断すれば死に至る激闘を前に、ダメージを受ければ惜しみなく回復結晶を使い、相手の攻撃は避けれるものならば極力避け、反撃を狙う戦法カウンターを続けた。例え飛竜のHPが数分毎に回復しても、彼は決して諦めなかった。

何が彼を其処まで突き動かしたのは分からない。それは彼と神のみぞが信じる”真実”――。

しかしその闘いの結末は、意外な形で幕を閉じる。

回復結晶も底を尽き、HPバーも赤の危険域にあり死を覚悟したその時――峡谷に差し込む一筋の太陽の光が、彼と飛竜を包んだ。気付けば彼の死闘は、夜が明けるまで続いていたのだ。

と同時に、飛竜からセリフが放たれた。「何と……永き時に渡り我と対峙して尚、夜明けの時まで立ち続けるとは。その業、見事なり」と。

その言葉から察するに飛竜の撃破が達成条件ではなく、『逃亡する事無く、夜明けの時間まで敵の攻撃に耐え続ける』のが条件だったのだろう。

飛竜はその言葉と共に数え切れぬ程の小さなポリゴンの大群に姿を変え、青年の身体へと吸い込まれた。

フラグMob撃破と言う名誉と同時に彼に齎せたのは、全ステー

タスの異常な上昇とスキルウィンドウの最後の一つに与えられた、
《飛翔》だけであった。

それ以降、彼は様々な場面で出し惜しみする事無く《飛翔》を使い、立ち塞がるモンスターを屠り続けた。

華麗に宙へと跳び、流星の如く飛来してモンスターにダメージを与えるその姿は、他プレイヤーを魅了させると同時に羨望の眼差しを浴びていた。

だからこそだろう。彼の異名が深く知れ渡ったのは。

その名は——《竜騎士カイン》。天高く飛翔する彼を止める術は、何もありません」と語られた。

「敵さん待ってくださいなさそうだし……そろそろ行きますか」

「ああ。お前の力……当てにしているからな、カイン」

「ハッ、任せとけて。俺はキリトの、引き立て役だからな！」

これは、その彼が世界初のVRMMO——《ソードアート・オンライン》で紡いだ物語である。

prologue (後書き)

今回出て来たユニークスキル《飛翔^{ジャンプ}》や彼と飛竜のやり取り・戦闘の詳細は、何れ本編で執筆致します。

次回辺りは物語の始まりである2020年11月6日——全てが終わりを告げ、新たな全てが始まった時の出来事を執筆する予定です。

まだまだ未熟者な私であり不定期更新となりますが、応援して頂けると幸いです。

ではまた次回にて……。飛翔^{ジャンプ}!!

episode 1: 始まりの時(前編) (前書き)

始まりとは、常に唐突である――

episode 1：始まりの時（前編）

咆哮が、大地と空に響き渡る。

だがそれは闘いの始まりを告げる雄叫びではない、その真逆……敗北した者が上げる絶叫だ。

その声の主は飛竜^{フイバーン}。魚の様にぬめりとした鱗を持ち、言葉ではとても形容し難い尾を持った飛竜は最後の咆哮を上げながら地面へと崩れ去って行く。

倒れた《Wivern of avarice》——”貪欲の飛竜”の名前の下に表示されていたHPバーは、その時既に空。口から大量の涎を地面に巻き散らかしていたその飛竜はやがて、微小なポリゴンの塊となりて消滅した。

「——って、何も落とさないのかよ！ 折角ポップするまで一時間も待ったつてのによぉ……チッ、これも物欲センサーの所為か……」

紫色のフォントで浮かび上がる獲得経験値とドロップリストを見ながら、怒鳴り声を上げたり急に冷静な面持ちとなったり忙しいのは、一人の青年だった。

防御は低いが身軽である革鎧だが一部一部が紫色の金属板で補強されており、細身な青年の体軀も相俟ってかなり身軽な防具を装着していた。また彼の背には三又の《槍》が着けられている姿を察すれば、彼は一人の《槍使い》なのだろう。そして同時に、先程の飛竜を倒したのも彼に間違いない。

「《アンノウンモンスター》でも出ない時には出ない………まあ、

RPGじゃそんな事は当たり前か」

彼以外誰もその場に存在していないのに彼は呟き、やれやれと手を振る。

《アンノウンモンスター》とは、固有の名前を持つ「未知なる（unknown）」モンスターの事を示す。略称として『UM』と表され、先程の飛竜もその一個体であった。

一撃一撃の攻撃が強烈であり、中にはその階層以上のレベルのモンスターが存在するとさえ言われている。故に低下層でもレベルが極端に高い場合がある為、ソロや低レベルの状態で討伐するには危険である。

しかしそのモンスターと闘う見返りは大きい。

ドロップ率に左右されるが、フラグMob並みの固有ドロップアイテムを持っており、それを目当てに幾度も闘いに臨む者も多いのは確かだ。現にこの青年も、それを目当てに赴いたのだから。

だがUMにはフラグMob同様、出現条件・出現場所が決まっている。

出現場所はその出現する階層に存在するNPCや目撃情報等で大体は分かる。がしかし、条件を満たさない限りそのモンスターは出現しない。

出現条件は様々だ。

あるモンスターを一定数倒して決められた場所へ向かうと出現する場合や、決められた場所に身を置き、時間を掛ける——数時間、最長で数日間に及ぶ事も——事により出現する場合等、条件を満たすだけでも一苦労と噂されている。

また、姿は同じでもステータスが異常に高いUMも存在する。それ等は《ハイレベルアンノウンモンスター（HUM）》と呼ばれ湧^ポ出する確率は極僅かだが、ソロで討伐するのはほぼ不可能と言われている。

「……………もう、帰ろう」

時は既に午後五時。やがて夜の闇がこの峡谷の地に訪れ、昼時よりも多くのモンスターが徘徊するだろう。

そうなる前に彼は街に戻るべく、足早に駆け始める。

とその時、一羽の鳥が彼の視界に映った。

優雅に空を舞う姿。しかし所詮はプログラムで設定された物。

だがその姿はかつて——二年前に初めてこの”世界”、《ソードアート・オンライン》で見た鳥の姿を甦らせた。地に縛られぬ事無く空を舞うその姿は現実の鳥と何ら変わりはず、美しい事もまた同じであると、以前と同じ感想を彼は再び胸に抱いた。

だがもう一つ、思い出す事もあった。

それは——全ての始まりと全ての終わり。

この世界に閉じ込められた自分と妹の、この世界での全てが始まったあの日を——。

*

2022年 十一月六日 日曜日。

ソードオンライン

『SAO』正式サービス開始。

この日が迫るその時までのメディアの殆どが、この話題で埋め尽くされていたのは記憶に新しい。

真の仮想世界を構築する『ナールヴギア』。その性能を最大限まで生かしたとも言える世界初のVRMMORPG仮想大規模オンラインマルチプレイヤーゲームの発売。

戦闘システムや構造とは従来のMMORPGにと通ずる部分があるが、最も違う所が一つある。

ナールヴギアによる仮想空間^{VR}への接続——即ち、『完全^{フル}ダイブ』だ。

それは現実との完全なる隔離を示す。

ユーザーは仮想の五感を与えられ、脳から自身の身体へ向けて放たれる命令を遮断・回収する事も可能となる。

簡単言ってしまうと、『仮想^{ゲーム}の世界の中に行ける』と言う事だ。

この事実が発表された瞬間、ゲームの世界に憧れを持つ人、或いは世間から『ゲーマー』と呼ばれる人間達を一瞬にして虜にした。

平凡な日常を生きて来た俺と妹も、例外ではなかった——。

「てい！ やあ！」

掛け声と共に放たれる短剣の連撃は、確実に青い肉体の猪の身体に喰らい付く。それと同時に『フレンジーボア』の名の下に表示されるHPバーも着実に減っていた。

しかし相手もそのままやられる気は無い様で、時折彼女の剣撃の間に反撃の突進を繰り出そうとするが、彼女の方は華麗なバックステップでそれを回避。そして再び一方的な攻撃を繰り返す。

「おー……中々やるなあ。全然当たらずにダメージばかり喰らってたさっきとは、まるで別人だぜ」

俊敏な動きに適する革鎧に身を包んだ金色のツインテールの少女——シリカは、俺の賞賛の言葉にも耳を傾く事無く、ただ目の前のモンスターに集中している。どうやらこの世界での、闘いのコツを掴んだ様だ。

シリカ———もとい、綾野 珪子^{けいこ}は俺の妹だ。

フリーのルポライターである親父が俺達の為に買って来た二台の《ナーヴギア》とこのVRMMORPG^{ソードアート・オンライン}。後者の方は並んで——しかも徹夜通しで——買って来たらしく、現実^{リアル}では今も尚疲労を癒す為に眠っている事だろう……。

だけど俺と珪子はテレビやゲーム雑誌で大々的に報じられていたゲームが何日、何週間もまたずに発売直ぐにプレイ出来る事に大喜びしていた。珪子なんかペットの猫の『ピナ』を抱いてぐるぐる回っていた程だ。

昼食をほんの数分で平らげた俺達は、サービス開始となる午後一時を今か今かと待ち続け、時計の針が一時を指した瞬間にロゲインしたのだった——。

「やああああっ！」

数分前の過去を思い出していた時、シリカの放った短剣基本技《ステイング》が猪の躯体に直撃した。

放った際に発生したと思われる白き閃光の残光が俺の視界に映り、同時に3分の1程であった《フレンジーボア》のHPバーを一気にゼロとさせた。

ぶひいと微かな声を上げた直後に猪の身体はポリゴンの塊に変換され、やがて碎け散った。

そして「やった！」と喜びの余り加算経験値に目も暮れず、満面の笑顔でジャンプするシリカの姿が其処にあった。

「良くやったなあシリカ。最初は如何なるかと心配したけど、無事に一人で倒せて良かった良かった」

「そ、そんな事ないよ。お兄ちゃんの方が凄いよ」

「おっ？ そう言ってくれるのは嬉しいねえ。まあでも実際、俺はMMORPG経験者だけだな」

シリカはこのSAOが人生初のMMORPGになるのだが、俺はそうではない。数年前前に”あるゲームシリーズ”から発売された一つのMMORPGをやり込んでいた経験があるからだ。

典型的なレベル制MMORPGだったのだが、ストーリーを追う要素が非常に充実しており、他のゲームとは似ても似つかぬ幻想的な世界観を創り上げていた。まだ幼かった俺は一瞬にしてそのゲームの虜になり、寝る時間も惜しんでプレイしたのは記憶に新しい。

今回のSAOはストーリー性は無い様だが、恐らく従来のMMORPGで存在した設定・要素は含まれているだけに違いない。幾ら世界初のVRMMORPGとは言え、現存するMMORPGから色々要素を取っている筈だ。現にこのゲームの中枢的存在である《剣^{スキル}》も他のMMORPGで似た様な物があつたのを覚えている。

「と……そろそろ落ちないと不味いかも」

「え？ 如何して？」

「ああいや、だって時間時間。見たいアニメが始まる時間までもう直ぐだからさ」

このゲームでは視界の右側に、現在時刻が表示される様に設定されている。今現在の時刻は五時半頃。もう直ぐしたら母親が夕食の準備を始める頃だろう。

「そんなの録画すれば良いのに……」シリカは不満そうに頬を膨らめ、「私一人じゃ、心細いよ」

「って言われてもなあ……今まで一話も見逃さずに見てるし、しかも物語の最終章だから楽し——」

と言い終わろうとした時、チラッとシリカを見つめる。俯く表情に光は無い。余程俺と一緒にまだまだ遊びたいと思っている様だ。

最近はシリカ——珪子と一緒に遊ぶ事は少なくなっている。小さい頃は珪子の手を握って色んな所に遊びに連れていたが、今となつては俺は15で珪子は12。高校入学等で色々と忙しくなっているこの時期、俺は余った時間をゲームに潰していた。珪子が時折俺と一緒に何かやろうと言い掛けても、俺は彼女の気も知らずにゲームを優先していた。

けど、このゲーム……SAOは違う。現実では違う部屋でPCの目の前に居るが、ゲームの中で俺と珪子と一緒に居るのだ。きっと珪子がSAOを買って貰って以上に喜んでいた理由は、俺と一緒にゲームが出来ると思ったからかもしれない……。

そう思うと、たかがアニメの一話を見逃す事等ほんとの些細な事で、妹と一緒に居られる時間を無駄にしてまで見る物ではないと思えてしまった。

「……わーっただよ」フツと柄にも無く微笑を浮かべた俺は、俯く珪子——シリカの頭の上に手を置きクシャクシャと乱暴に撫でる。

「夕食の時間まで、付き合ってやる」

「………良いの？」

「まあな。俺もログアウト寸前には1レベルぐらい上げたいと思ってた所だし、それにシリカ一人だと心配だからな。直ぐ泣くし」

「そ、そんな事ないよ！ 私泣かないもん！」

「大丈夫大丈夫。強がり言わなくても大丈夫」
「強がりじゃないもん！ 本当の事だもん！」

まるで現実の様に会話する俺とシリカ。こう言うゲームの中でも他人と他愛の無い会話が出来ると言う事も、MMORPGの魅力の一つだ。

このゲームを通して、もっと珪子と”絆”が深めたら良いな……
…そんな平和な未来を案じていた時、

リンゴーン、リンゴーン――

突如として、巨大な鐘の音が大地に響き渡る。

それが全ての幕開けだと知るのは、それから数分後の事であった――。

episode 1：始まりの時（前編）（後書き）

まずは第一話です。実はシリカたんのお兄ちゃんでした。シリカファンの皆様申し訳御座いませんorz

ゲームをやり過ぎて家族の交流が途切れるって言うケースって、ありますよね？昔私もそんな経験がありました。

今現在は多忙な身故にゲームする時間は減りましたが、家族との時間を無くしてまでゲームしていたあの頃の自分は駄目だったなあと物思いに耽ってたりw

今回冒頭に出て来た《UM》はオリ設定となります。

単なるレアモンスターではなく、条件を満たさなくては出現しないとしないモンスターとして出しました。（フラグMobと通ずる部分は多々ありますがw

元ネタはFF???より、《ノートリアスモンスター》です。

今回は後編。茅場の演説をシリカ&カイン視点で描いて行く予定になります。

感想や評価も大絶賛で待っております！では、飛翔^{ジャン}！

PS；

今回冒頭で倒した飛竜……『一狩り行こうぜ』なゲームを『ネット』でプレイしていた方は見覚えがあるかもしれません（え

e p i s o d e 2 : 始 ま り の 時 (後 編) (前 書 き)

始まりとは常に唐突である。

青年の物語も、この時を以って幕を上げる――。

episode 2：始まりの時（後編）

突如として周囲に木霊する鐘の音のサウンドに、俺とシリカは表情を驚愕の色に染める。

「……ッ!？」

「な、何……？ 何かのイベント……？」

突然の出来事に困惑する最中、現実は一気に進んで行く。

今度は俺とシリカの身体を、蒼の光の柱が包み込んだのだ。この現象は恐らくRPGで言う《転移^{テレポート}》に違いない。その証拠に、蒼の壁の向こうの景色が段々と薄れて行っている。

だが——これは明らかにおかしい現象だ。

ゲーム雑誌で紹介されていたこのSAOには大概のRPGに存在する《魔法》は存在しない。故にこの様な現象を起こす為には転移用のアイテムを使用しなくてはならない筈。

しかし俺はそのアイテムを持っていないし、そもそもコマンドを選択すらしていない。だとしたらこの現象の元凶は運営側なのだろうが。だが何のアナウンスもなしに、俺達を転移するのだろうか。

思考を張り巡らせていると、何の前触れも無く身体を包む光がより一層輝き始めた。

やがてその光が消えて行くと共に、視界が取り戻される。しかし眼前に映るのは夕暮れの草原ではなく、街の風景だった。

街路樹が整然と並び、綺麗に敷き詰められた石畳の上で他のNPCが行き交い、眼前の向こうに聳え立つ漆黒の光を放つ宮殿——
|。

間違い無い、此処は全てのプレイヤーのスタート地点となる街――
《はじまりの街》だ。

「お、お兄ちゃん、何であたしたち……此処に？」

「俺にも分からないよ。それに、転移されたのは俺達だけじゃなさそうだしな……」

視界を動かし、周囲に立つプレイヤーを見回す。現実とはかけ離れた姿、装備をその身に宿す者達プレイヤーが所狭しと、この場所に佇んでいる。彼等も俺達と同じく、此処へと転移されたのだろう。

だがその数は異常だ。この広場全体が埋め尽くされる程の人数となると……一万は必要となる筈。

（まさか、全プレイヤーが此処に……？）

他の人達も同じ様な事を考えていたのだろう。僅か数秒間だけは全員押し黙り周囲を見渡していたが、やがて困惑と不安と怒りの声が聞こえ始める。隣に居るシリカも不安なのか、俺に寄り添い腕を握っている。

と那時――上を見る、と何処からか声が放たれた。それまでざわついていたプレイヤーの視線は一気に上空に向けられる。

だが其処には、異様な存在が浮かんでいた。

真っ赤なフォントで文字が表示された後、身長20m程はある真紅のローブを纏った顔無しの人の姿が突如出現したのだ。

あれが此処のGMなのだろうか、だがこの風貌がGMの姿とはとてもではないが思えない。明らかに俺達の不安感を煽る様な姿にしか、俺には思えなかった。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

低く、周囲に響き渡る男の声が、頭上から放たれる。

”私の世界”——GMであれば確かに、この世界を意のままに操る事は容易い事。しかし運営側の人間が全プレイヤーにその様な言葉を言っただけの良いものだろうか。あのローブの男は仮にも運営側の人間——即ち社員だと言うのに。

しかし俺が其処まで考えた推論は、次の言葉で一気に頭の中から消滅する。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

「ッ!? 茅場晶彦だって……!?!」

俺はその名を知っている。いや、このゲームをやる人間に彼を知らない人間は居ない筈だ。何故ならこのナーヴギアを設計し、このSAOをも創り上げた人物なのだから。

彼の名はメディアや雑誌で姿を見せる事は極稀だった。彼は極力人前に出ることを嫌っていたからだ。しかし彼に憧れる人間が居ない訳がなく、ネットでは彼の事に関する記事が幾つも存在していた。だからこそ分からなかった。何故彼がこうして俺達の眼前に立ち、このような言葉を吐いているのかを。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート・オ

ンライン》本来の仕様である。

故に、諸君は今後この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることはできない』

頂と言うと……此処の頂上と言う事なのだろうか。それともまた別の意味が込められているのだろうか。

その疑問に没頭するよりも先に、茅場の声が俺の思考を途切らす。

『……また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合——』

僅かな間。それがより一層俺の不安感を攪う。
そして放たれる——”死の宣告”。

『——ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

生命活動の停止——即ち、”死”。全ての終わり、人生の終わりがこのナーヴギアによって齎される。

電源を切っても、ロックを解除し外そうとした場合、その者は殺される……。
ユーザー

「う……嘘だよね、お兄ちゃん。本当に死ぬ訳、ないよね？」
「……………」

腕を握るシリカの力が強まり、今にも泣きそうな表情で俺を見上げて問い掛けて来ても、俺には答える事が出来なかった。只々齒を食い縛り、拳を握り締める。

以前ナーヴギアをネットで調べた時に知った事だが、稼働する為に大容量のバッテリーが内部に埋め込んでいるらしい。もしそれが一気に出力された場合、人間の脳を焼き尽くす事等容易い事だ。

（くそつ、全部本当の事なのか………！）

とその時ふと、一つの考えが頭を過った。

もし……もし、このゲームの中でHPが尽きたら、その時は一体どうなるのだろうか。

大概のMMORPGであればHPが尽きた瞬間に転送が始まり、設定された場所・街に戻って来るのがセオリーだ。このゲームも例外では無い筈。

けど如何してか、俺にはその概念がこのゲームでは無い様に感じた。

考えが至る一つの答えは、もっと現実的な”答え”——。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって《ソードアーク・オンライン》は、既にただのゲームではない。もう一つの現実と云うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に——諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

茅場と言葉によって、導かされた答えは——”死”。真の”

死”。

この頭上に表示されているHPが左端まで到達し0になった瞬間、俺はこの現実から、同時にもう一つの現実からも消える。

そして理解する。決してリトライ出来ないRPGの中に俺は居ると。

モンスターと遭遇したら敗北してはいけない。即死級のトラップにも引つ掛かってはいけない。PKされてもいけない——その極限の世界の中で、生きると言うのか？

「……………冗談だろ」

その様な状況下で俺達は如何するだろうか。態々フィールドに出てモンスターと闘うだろうか？

答えは簡単だ。全員がこの安全でモンスターも襲って来ない街の中に居続けるだろう。

しかし——次に放たれた言葉が、再び俺の思考は音を立てて崩れ去る。

『諸君がゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッドの最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

……つまり此処から生きて帰るには、”ゲーム内で死亡せず、100層までクリアしなくてはならない”と言う事か。

無理だ、頭を埋め尽くすはその三文字。

普通のRPGであれば数日間でクリアする事は可能だ。しかし此処はMMORPG。たった数日、数週間でクリア出来るとは到底思

えない。恐らくそれ以上……数か月・数年程の時間が掛かるだろう。

「こんな……こんな事、信じたくないよ……」

隣でとうとう瞳から一筋の涙を溢しながら呟くシリカ。

彼女も俺も信じたくはない。ログアウトは決して出来ず、100層まで誰かが到達しクリアしなければ戻れない。そしてHPが尽きれば——”死ぬ”。

「……珪子」

「もうお母さんやお父さんに会えないの……？　ピナと遊ぶ事も出来ないの……？」

そんなの……嫌だ……よ……」

「ッ——！！」

茅場によって齎された真実の言葉を聞き絶望したのか、ゆっくりと瞳を閉じながら地面に崩れ落ちそうになるシリカ。俺は彼女の身体が地面に落ちる直前に抱き止め、突如として何の前触れも無くその場から走り出した。

何で走り出したのかは俺でも分からなかった。

茅場の言葉を否定したかったのか。アイツの言葉を聞きたくなかったのか。

いや……俺は多分、”これ以上、珪子^{シリカ}を悲しませたくなかった”のだろう。プレイヤーの間を縫う様に走り続け、妹^{シリカ}の身体を決して離す事無くこの場を後にする。

例え、未だに茅場の言葉が続いていようと……。

あたしがもう一度目を見開いた時には、其処は知らない天井だった。何時も自分が一日の始まりと終わりの時に見上げていた天井とは違う、時代を感じる古びた天井。

同時に、自分がベッドの上で寝ていた事もあたしは知った。あの茅場とか言う人の言葉を聞いていたら意識が遠退いた事までは覚えていたので、恐らくあたしは何処かのベット——恐らく宿屋——に寝かされていたのだろう。

(……。現実じゃ、ないんだ……)

先程自分の目の前で告げられた真実。此処が、もう一つの”現実”となった真実。

信じたくない……現実に戻りたい……。

再び瞳の奥から涙が込み上げ、一筋の涙が頬を伝う——けど。

「もう泣くなよ、珪子」

耳に響き渡る優しい声。

この”現実”^{ゲーム}に居るたった一人の家族——お兄ちゃんが伝う涙を拭い取った。視線を右に向けると、其処には本当の顔をしてお兄ちゃんが、微笑を浮かべて座っていた。

「お兄ちゃん……？ でも、此処はゲームの中なのに、え……？」
「そうおろおろすんなって。ほら」

困惑するあたしに向かって差し出したのは、小さな《手鏡》。
何でこんな物を思いつつも、あたしはそれを手に取り自分の顔を見た瞬間——驚愕した。

其処に映っていたのはキャラクターメイキングで創り上げた”仮想のあたしの顔”ではなく、”現実のあたしの顔”だったからだ。

「え……ええっ！？ 何であたし、本当の顔に……！？」

「さっき宿屋に来た他の人から聞いた。茅場の一つのプレゼントで、此処がもう一つの現実である事の証拠」、だそうだ」

「証……拠……」

淡々と告げるお兄ちゃんの声を聞きながら、あたしの心は”絶望”と”悲しみ”の色に染まって行く。

あの人が如何してこの様な事をしたのか、何が目的なのか。その本人しか分からない様な疑問は持たず、今後の”未来”を真っ先に案じた。

クリアしなければこの現実からは脱出出来ない——しかし自分が強大なモンスターと闘い打ち勝つ姿等、到底想像出来ない。いや、何も自ら闘いの道に進む必要は無い筈だ。自分よりも強い人——今日の前に居るお兄ちゃんの様な——が集まり、一層一層順調にクリアしていき、何時の日かクリアする時が来るだろう。自分分は安全な街の片隅でその時を待っていれば良い——。

それがあたしの導き出した、これからの道。

「——お兄ちゃんは、これからどうするの？」

だからこそ知りたかった。この現実ゲームでの唯一の家族で、あたしの大好きなお兄ちゃんの、答えを。

お兄ちゃんは直ぐには答えず、暫くの間沈黙を続けた。けど不意に、あたしの頭に手を置くと共に告げた。

「俺は……行くよ。俺はこの現実せかいで、生きて行く」

—— やっぱり、そうなんだね……。

お兄ちゃんは小さい頃から何時もこうだった。どんなに難しい事でも挑戦し、どんなに悲しい事があっても決して悔やまず、何時も悩んだり悲しんだりするあたしを励ましてくれた。

その意思はこの現実でも変わらない。”死”を恐れるあたしとは正反対で、自らの力を信じて突き進んで行く意思が、今のお兄ちゃんの心にはある。

「そつか……。強いんだね、お兄ちゃんは」

「強くなかないさ。ただ、目の前の現実から目を背けたくないだけさ。此処から出られるのが何時になるか分からないけど、その時が来るまで俺は精一杯生きてみせる。勿論、絶対死なずにな」

ニツと笑顔を浮かべ、クシャクシャとお兄ちゃんはあたしの頭を撫でた。現実リアルでのこの撫で方は余り好きじゃないけど、今だけはとも心暖かい感じがした。

「さて……と」撫でるのを止め、私の頭から手を離したお兄ちゃんは「そろそろ、行くかな」

「え……？ もう行っちゃうの……？」

「……。暫く留まるのも手だが、此処には余りにも人が多過ぎる。モンスターも十分に狩れない状況が続くはずだ。だったら次の村に行った方が良いんだ、なるべく早くな。もう他の誰かは自身のレベルや拠点を確保する為に次の村に向かつてる筈……。βテスト経験者ならそれも有り得るからな」

βテスト経験者……このSAOが発売される前に、このゲームを試験的にプレイした人達の事だ。確かにあたしたちの様に初めてこのSAOをプレイし始めた人たちよりも、いち早くプレイした人の

方があたしたちよりもこのゲームの地形やモンスター、ノウハウを知っているだろう。

お兄ちゃんはそれを理解した上で、この答えを出したのかな……。

「夜時の今にフィールドに出るのは少々危険だと思うけど、なるべく早い方が良いからな……。

シリカは、如何する？ 危険だけど一緒に……来るか？」

「……私、は……」

此処に残る、とは直ぐには言えなかった。先程出した”答え”と『お兄ちゃんと離れたくない』と言う”願望”が心の中で複雑に絡み合っていた。

このままお兄ちゃんに付いて行く事も出来ない訳じゃない。ただどそれに伴い、危険なモンスターの徘徊するフィールドに足を踏み入れるのは怖い。先程の様な青い猪のモンスターならば倒せる自身はあるが、もしもつと強いモンスターが出て太刀打ち出来なかったらと考えると、恐怖が心の底から這い上がって来る。

それにあたしはこのSAOが人生初のMMORPG。行く先々で分からない事・仕様に幾度もぶつかってしまいかもしれない。それに戦闘でもし私がしくじって、お兄ちゃんを傷付けたり……死なせたりしたら……私は……。

だからこそ、私はシートを握る手により一層力を込めて、答えた。

「あたし——此処に、残るよ」

お兄ちゃんは一瞬驚いた様な表情をしたが、直ぐに何時もの優しい表情に戻って「そうか」と言ってくれた。何も理由を聞かないのはきつと、あたしが”死”を恐れている事を分かっていたのかもしれない……。

「ごめんね、お兄ちゃん。あたし……」

「謝る必要なんてないさ、シリカ。それがお前の出した答えならそれに従うと良い。……本当は俺もお前と一緒にいきたいけど、お前を無理やり連れて、危険な目なんかに合わせたくないから……」

「お兄ちゃん……」

俯くお兄ちゃんに手を伸ばそうとした同タイミングでお兄ちゃんは立ち上がり、あたしに背を向けて部屋の唯一の出入り口である木製の扉へと向かって行く。

視界に映る去って行くお兄ちゃんの背は酷く悲しそうで、何時もの様な明るさは見られない。

それに……あたしとお兄ちゃんは離れ離れになってしまう。メルでしかやり取り出来ず、互いの身の安全も知る事も出来ない。そう思い続けると、去って行くお兄ちゃんに声を掛けずにはいらなかった。

「お兄ちゃん！」

ドアノブに手を置こうとしていたお兄ちゃんの動きが止まるが、直ぐには此方を振り返ろうとはしない。それでもあたしは、言葉を続けた。

「また……会えるよね……？」

本当はもつと言いたかった。『行かないで』や『傍にいて欲しい』と。

でも私の我儘でお兄ちゃんに迷惑を掛けたくない。お兄ちゃんのことを止められる事なんてあたしには今も昔も出来なかった。だからこそ、唯一出た言葉がこれだった。

お兄ちゃんはやつくりと此方を振り返り、何時もの笑顔を見せてくれた。

「勿論。シリカがメールしてくれば飛んで来るよ、どんな時だったとしてもね」

「本当……？ 本当に本当……？」

「ああ、本当さ。約束するよ」

その言葉と共に、お兄ちゃんは扉を開けた。

木製の扉が軋んだ音を立てるのを聞きながら、お兄ちゃんは扉の向こう——部屋の外へと出た。私を部屋に一人残して。

でも扉が閉まる瞬間まで、お兄ちゃんはずっとこっちを見続けていた。あたしも閉まる直前までお兄ちゃんを見続けていた。

そして閉まる直前、お兄ちゃんは小さく告げた。『またな、珪子』と——。

（うん……。またな、空お兄ちゃん——）

口に出さず心の中で、あたしは答える。

そして扉が閉まると共に、頬に再び一筋の涙が伝った——。

走る。走る。走る。

夜の闇に包まれた街の中を、俺は風の如く駆け抜ける。行き交うNPCやプレイヤーに目も暮れず、俺は街の北西に位置するゲート

に向かって走り続けた。

その先には先程俺とシリカが戦闘をしていたフィールド——
広大な草原と鬱蒼と茂る森がある。そしてその先に小さな村がある
筈だ。

（悲しい幕開けだな……けどまあ良しさ。この現実^{せかい}、駆け巡ってや
ろうじゃねえの。そんでもって何時の日かきつと、クリアしてやる
さ……！）

心の中で揺るぐ事の無い”意思”を携えながら俺は走り続ける。
サバイバルと化した、今まで経験したこのないRPGのストーリ
ーを、一步一步踏み締めながら——。

episode 2：始まりの時（後編） （後書き）

茅場の演説がほぼ同じだったのはちょっと難産でした。もっとオリジナリティを出さないと……。

次回は主人公……綾野空こと《カイン》を主軸として一層での話を続けるか、それとも少し層を進めるか迷ってます。それに後の友人的存在となるキリトの登場とかも考えなくては（汗

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

episode 3 : 彷徨いと邂逅（前書き）

大切な友人つてのはさ、何時の間にか出来てるもんなんだよな。
ひよんな事が切欠となつて友達になるとか、ふとした出会いで関係
を持つとか。

まあこれは……女性にも当て嵌まるかもしれないけどさ。

episode 3：彷徨いと邂逅

大概のMMORPGにおいて、《夜間》は危険な時間帯だ。

光源が無ければ正しく一寸先は闇、真つ暗闇の中を進む事になる。洞窟系・地下系統のダンジョンであれば松明等を手に持っていれば何とかなるが、平原や森ではそうはいかない。

自身と壁が近い状態が続く前者であれば例えポップしたモンスターと言えど前方や後方と限られる。この場合は遭遇しても冷静に判断出来るが、360度全てがフィールドの上に立ち一つの光源の無い後者だと何時何処でどの方角から襲われるか分かりはしない。(無論索敵スキルがあればそれなりに対処は出来るが)

どちらにせよ、夜間のフィールドをたつた一人で進んで行くのは危険な行為——なのだが、

「——俺はその危険な行為を、自らやってるんですけどね！」

そう、視界の殆どが闇に包まれていると言うのに、俺はそんな事は御構い無く走り続けていた。と言っても其処は独自のVR空間。薄い青い光が足下まで照らしてくれるのが唯一の救いだった。

シリカの前でカッコ付けて勢い良く出たのは良かったものの……
……こつも直ぐに村に辿り着けず、森の中を駆け巡る事になるうとは……。

「全くついてないぜ……せめて場所ぐらい知っとけば良かウボア！」

独り言をばやきながら走っていたのが仇になった……のかもしれない

ない。

俺は足を思いつ切り木の根元に引つ掛け、前のめりに古い”あのゲーム”の奇妙な断末魔を上げながら盛大に倒れた。……正直現実と同じくらい痛い。

「痛つつつ……ちくせう、やっぱ朝まで待つとけば良かったかも……」

心の中は後悔で一杯だった。《はじまりの街》に残って暫く身を固めていれば良かった事や、何も焦らずシリカの隣に居るべきだったのかもと、頭の中に過っては消え逝く後悔の念。

そして最後に過った後悔は、『何も直ぐにこのゲームを始めなければ』と言う極論。

(……いや、それはこの世界に存在する全プレイヤーが持つ”後悔”だ、俺個人の問題じゃない)

俺は立ち上がらずそのままゴロンと地面を寝転がり、空を仰いだ。しかしその視線の先には満天の夜空が広がってはいない。次層の底が見えるだけだ。月や太陽は朝と夕方にしか見えない。

”本当の”現実ではこの先には確かに夜空がある筈だ。だけどそれが無く代わりに空の大半を埋め尽くすのは次の層の底。かと言ってその次の層が上がって空を見上げてても同じ景色が広がるだけ。これが99層まで続き、ラストの100層目で漸く大いなる空を拝められるのだろつ。

それがこの”現実”と本当の”現実”の相違点の一つ――。

(……行くか)

このまま物思いに耽っていたらきつと、現実の事が走馬灯の如く頭を駆け巡り、心は悲しみと後悔に包まれる……そうなる前に俺は立ち上がり、思考を切り替えて再び走り続けた。

無論その真実から逃げている訳ではない。俺はただ、立ち止まりたくないだけなのだ。

家族・友人・日々の生活・学校・行事……今まで俺の”生活”を構成していた物はこのゲームを始めた瞬間と同時に崩れ去り、この世界が俺の新たな”現実”となった。これから構成されていく殆どの要素が、”この世界で生きて行く為”となるだろう。

それを受け止めるか否かは個人の自由だ。HPバーがゼロになる事を恐れ街に籠るもよし、それを受け止めて真正面からこの世界の条理に向かって行くのもよし。自分自身の道は自分自身の選択と力で切り開いていくしかないのだ、この世界では。

そして珪子——シリカは前者を選び、俺は後者を選んだ。後悔していない……と言えば嘘になるが、何時までも同じ場所に立ち止まってまるで自分の殻に閉じ籠る様な行為はしなくなかったのだ。

だからこそ俺はこうしてフィールドを駆け巡っている。心の奥底に、”死の恐怖”を抱きながら……。

とその時——視界に映る、異形な生物の姿。俺は慌てて傍に立つ木の陰に隠れた。

そっと頭を出してその生物の姿を改めて視認する。大きさは約1mで、一言で容姿を言えば、《蠢き回る植物》だろうか。まるで現

実に存在する植物を髣髴とさせる口を持ち、そこから涎——恐らく粘液だと思うが——を垂らしながらウロウロしている。

「……漸く猪とかじゃなくて、ファンタジー染みたモンスターとの邂逅だな」

”この様な植物は現実には存在しない。しかし此处には——この世界には存在する”。

俺は本当の”怪物”と初めて出会えた事に意気揚々になりつつも、内心では”死の恐怖”が段々と心の奥底から這い上がって来ていた。けどそうなる前に、殺^やられる前に——

「殺^やつてやらア……!!」

威力も取り柄も無い平凡な両手槍——《スピア》を背から引き抜き、木の陰から躍り出た。それに気付いた植物は高々に二つのツルを上げる。恐らくあれがヤツの威嚇行為なのだろう。

「シュアアアア!!!」

口から大量の涎を撒き散らしながら、植物は咆哮する。しかしその咆哮に耳を傾ける事も無く怖気づく事もなく、ヤツの下へと俺は地を蹴り駆け出していた。

「——いらつしゃいませええええ——!!!」

かつてプレイしていたとある主人公の闘いの幕開けとなる咆哮を上げながら、槍の先端を植物目掛けて突き出した——。

＊

「ふう……」

二匹目の《リトルネペント》を撃破した俺は、安堵の溜息を吐く。眼前には加算経験値が浮かび上がるがそれには目も暮れず、俺は再度周囲を見渡した。

リトルネペントのカーソルは未だに索敵範囲内ギリギリに複数存在している。後数十分もあれば十匹以上は狩れる筈。他のプレイヤーが此処に来る前に片付けなくては――

「――！」

その思考を途切らせたのは、視界に浮かび上がった一つのカーソル。明らかにリトルネペントとは違うそのカーソルの正体は――
「プレイヤー”のカーソル」。

「チツ……」

俺は無意識の内に舌打ちしていた。俺はこのまま他人が此処に来る前に可能な限り数を稼ぎ、一刻も早く《花付き》のリトルネペントを撃破する心算だったのだが……まさかこれからと言う所でもう追いつかれたとは。

だが不可解な事にそのカーソルが動くと同時に、一匹のリトルネペントも動いている。後者の方を先頭に両方のカーソルが一直線上に並び動いているのだ。それも……此方側に。

「……………」

木々の向こうで一体何が如何なっているのか理解出来ないが、剣の柄を強く握り締め何が来ても良い様に戦闘態勢を取った。

そして段々とカーソルが近づき始め、そして先に姿を現したのは

——HPを赤の危険域まで減らしたリトルネベントだった。その背後に、

「おおおおおつつつ！！！！」

リトルネベントの胴体に槍を突き刺したまま、全力疾走しているプレイヤーの姿があった。

その光景に俺は愕然とするしかなかった。今の俺でさえレベルは一桁。あのリトルネベントにすら及ばないレベルなのだ。下手に行動すれば思わぬ痛手を受け、最悪の場合”死”に至る。

しかしこの男——いや、少年は危険なモンスターに対して冷静に判断して闘わず、ゴリ押しで倒そうとしている。レベルもスキルも、きつと俺と大差無い筈だ、なのに…………。

そんな俺の考えを余所に、少年は俺を通り過ぎてリトルネベントを突き刺したまま直進して行く。彼と彼に突き刺されたリトルネベントが行く先には——古びた一本の大本。

直後、ズウンと小さく響く音を立てたと共に、彼等は停止した。

槍の先端は衝撃によってより一層深々と突き刺さり、リトルネベントのHPもまた減少し——ゼロになった。

「ふいー」と息絶え青く凍り付き爆散したリトルネベントを視認し、溜息を着く少年。

「試しに突撃してみたけど……………これ危険だな。思い付きで実践するのは危険過ぎるな、うん」

と訳の分からない独り言を呟くと不意に、少年は俺の方向へと顔を向けた。

俺と同じくらいの身長で金髪の少年。歳は俺と変わらない様だが………防具ははじまりの街で売っていた革鎧と安価の両手槍を携えていた。

「おっと、見苦しい所見せて悪かったな。俺、結構思い付きで無茶な事ばかりする性分です」

「あ、ああ……」

俺に対して警戒も驚愕もせずにニカツと笑い気さくに話し掛けて来た少年に対し、俺は剣を鞘に収め空になった両手をコートに入れた。

この時の俺は知る由も無かっただろう。

俺とこの少年——《カイン》が大切な”友達”になる事を、背を預ける”戦友”になる事を、この時からずっと、現実と仮想空間の両方で長い付き合いになる事を。

俺はまだ、知らない——。

episode 3：彷徨いと邂逅（後書き）

今回は八巻の《はじまりの日》の話でした。丁度コペルと会う数分前となりますね。

後カインが今回（思い付きで）やったあの突撃みたいな技ですが…
… 実際SAOで出来んのかなと小一時間（汗 要領としては某モンスターを狩猟生活だのランスの突進をイメージしてたり（オイ

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

PS；

今回冒頭をカインの独白にしてみました。今後は第三者の語りと彼の独白を毎回ランダムに書いて行こうと思います。

episode 4・闇夜の森（前編）（前書き）

闇夜の中で冒険者は、^{プレイヤー}”現実”を知る。
そして――

episode 4：闇夜の森（前編）

——やっぱ、近くに村があるんだな……。

俺は眼前に佇む黒髪の少年を視認して心中で呟く。やはり《はじまりの街》で予想していた事は的中した。

少年の背中に装着されているのは片手剣の鞘。彼の手に携える剣から察するにあれば初期武器の《スモールソード》の様だが、防具面では《はじまりの街》の防具屋では見掛けなかったコートを着用している。恐らく近くの村で購入したに違いない。

眼前に立つ少年が浮かべていた表情は、呆氣に取られたか^{かお}の様であった。……無理も無いだろう、あの植物を突き刺したまま直進して来て、現れたのだから。

このまま沈黙し続けるとこの場の空気が一層重くなるだろうから、取り敢えず俺はニカツと笑い声を掛けた。

「——おっと、見苦しい所見せて悪かったな。俺、結構思い付きで無茶な事ばつかする性分でさ」

「あ、ああ……」

少年は俺に対して警戒を解いたのか、片手剣を鞘に納めると両手をコートのポケットに突っこんで俺から視線を逸らす。

しかし改めて少年の顔を見つめると……何だか女の子みたいな顔だな、と思ってしまった。モジモジと動く所もなんか女の子っぽい。

「……………」と物思いに耽っていると、少年の視線が此方の方へ向けられた。

「え、えーと、如何したんだ？」

「あ、ああいや…… 此処に来るのが早いなと思ってさ。他の誰かが此処に来るのは数時間後だろうと踏んでたんだが」

「あー…… まあ、な。けど最初から此処が目的地だった訳じゃないぜ？ 早くレベル上げたり装備を充実させたいと思って、『はじまりの街』から行く先決めずに飛び出した結果——」

「…… 迷って、それで偶然此処に辿り着いたと？」

「そー言う事。ホント俺って、馬鹿だよねえ」

嘘はついていない。俺はこの付近に存在するであろう村には寄ってないし、そもそも最初から此処に辿り着くのが目的だった訳ではない。ただ単に、“走り回って迷った拳句” 此処に辿り着いた。ただそれだけなのだ。

しかし俺が来る以前に先に居た彼はきっと、『βテスター』なのだろう。

正式サービスが始まったのはこの日、十一月六日だ。しかしその三か月前に、抽選によって選ばれた千人の人間が俺達に先立ってこのゲームをプレイしている。それ即ち、稼働試験——βテストなのだ。

申し込みは数十万以上にも及んだと聞いている。ナーヴギアを持つていなかった俺は応募しなかったが、購入したゲーム雑誌では見事βテスターとなった人のインタビュー記事が掲載されているのを覚えている。

今俺の眼前に立つ少年も同じだ。俺よりも先にこのゲームをプレイし、経験と知識と技術を得ている。

ダンジョンの構造、武器屋・防具屋等の焦点の品揃え、クエストの発生条件・場所・人物、モンスターのポップ場所・弱点…… まるで攻略本のように様々な知識が、彼の頭の中に幾つも存在するのだ

ろう。

だからこそその知識を動力源として、誰よりも先に街を飛び出し、誰よりも先に此处へ辿り着いた——そう考えるのが妥当だ。

「何だ、そうだったのか。俺はてつきり、俺と同じ元βテスターなのかと思ってたよ」

「ははは。生憎、宝くじに当選する程の強運は持ち合わせて無いんでね。精々、割った卵の中から黄身が二つ出てくるのが数回続く程の運しかないよ」

「…………それはそれで強運だろ」

補足された言葉に俺は「確かにな」と再びニカツと笑う。

だがそれを最後に会話が途切れてしまう。何か話題をと考えるがβテスターの彼が興味を示す様な話題なんかとても見つからない。

しかし不思議なことに、俺は自然に言葉を放っていた。

「な、なあ。暫く一緒に行ってもいいか？」

「え……………」

しまった、と俺は不意に出てしまった言葉を何の躊躇いもなく出してしまったことを後悔してしまう。ほんの数分前に出会ったばかりの人間がパーティーを組もうと持ち掛けるのは余りにもおかしい。案の定、彼はポカンとした表情を上げている。

俺は慌てて次の言葉を頭の中で模索する。

「い、いやさ、こんな夜時に森の中に居るって事は何かのクエでもしてんのかなーと思ってさ。あの植物倒してみたいだったし」

「…………確かにクエやってるけど、一人用だぞ」

「あー……………それってもしかして、キーアイテム取得の方？」

「ああ。さっきの植物——《リトルネペント》からドロップする

《リトルネペントの胚珠》を手に入れなくちゃならない。けどノーマルからは絶対にドロップしない。ドロップするのは口の上に花を咲かせたヤツのみ。まあ、出現確率が1%以下なんだけど」

「成程……だったら尚更だ。エリア内のノーマルのリトルネペントを狩り続けば、いつか必ずその花の付いたヤツがポップする。一人よりも二人の方が効率は良くなる筈だぜ」

《確率ポップ》。数あるMMORPGの中で広く流通している、ポップ条件の一つ。殆どのレアモンスターがポップする条件は大抵これだ。

「彼が受けているクエはどうやら”指定されたモンスターからドロップするアイテムを取得しクエスト依頼主に届ける”内容の様だ。その上指定されたモンスターはポップ率1%のレアモンスター。目当てのモンスターを簡単に出現させたいのであれば、そのエリア内のモンスターを風潰しに撃破しポップ確率を上げる方法が最も効率が良い。恐らくこの少年もその方法を取っているのだろう。」

「問いに対し少年は直ぐには返答しなかった。何か戸惑っているのか、或いは俺を警戒しているのか……まあこの提案自体、少し強引過ぎたと自分でも感じていたが。」

「別にパーティーを組もうって訳じゃないんだ。ただ一緒に行きたいだけなんだ」付け加えて、俺は言葉を続ける。

「俺は単にレベルを上げただけさ。でも一人じゃ心細いから元βテスターであるアンタと行動したいんだ。その代わりに俺はアンタのクエストを手伝う。《花つき》が出て胚珠をドロップしたらアンタの物。二人でノーマルを狩り続ければ俺とアンタのレベルは上がり、運が良ければ《花つき》と遭遇し胚珠をゲット出来る。一石二鳥、悪くは無いと思うんだが……駄目か？」

「……………」

やはり直ぐには返答は返って来ない。やはり、こんな上手い話を持ち掛けた事に警戒しているのかもしれない。MMORPGでは”都合の良い話の裏には、大抵裏がある”のが常識。このSAOも例外では無い筈。彼のような元β^{ゲイマー}テスターが警戒するのも、当たり前なのかもしれない。

俺は疑いを晴らさなくてはと決断し、決して疾しい事は考えていないと告げようとした瞬間、

「……分かった」

「——へ？ 良いの……か？ ホントに、良いのか？」

「ああ…… パーティーじゃないなら、俺はそれで……」

「そうか…… 分かったよ」

パーティーでなくとも、一緒に行動してくれる事を決断してくれたのは、心の底から嬉しかった。移動中にこのSAOの事についての情報を貰えるかもしれない。自分勝手に自己中心的な考え方だが、始まってしまったこの世界（SAO）の中で元βテスターの様に迅速に行動する為には、知識や情報・ノウハウを彼から得なければならぬ。

俺は有難うと、ニカツと笑うと共に右手を差し出した。

「《カイン》だ。ホント、俺の我儘聞いてくれてアリガトな」

「ああ、宜しく。俺は…… 《キリト》」

静かに握手した直後、直ぐに少年——キリトの視線は九時の方向に向けられる。俺も反射的にその方向を見ると、ゆっくり動き回る二つのカーソルが点在していた。恐らくあれは、リトルネペントだ。

「おっと、早速標的発見だなキリト」

「あれはノーマルだよ。さあ、他のプレイヤーが来る前に《花つき》を倒して胚珠を出さないとな」

「了解！ んじゃ、ガンガン行きますかー!!」

互いに握手していた手を握り拳に変え互いに合わせた後、俺とキリトは二体のリトルネペントを標的にし、駆け始めた。

最初は、俺と大差無く此処へとたどり着いたカインが俺と同じ――元βテスターだと思っていた。しかしカインはただ迷って来ただけで、βテストを受けていない普通のプレイヤーだったのだ。何の情報も無く走り続け道が分かり難い此処に辿り着いたのは、強運による恩恵なのかもしれない。

あの時カインが持ち掛けて来た提案に対し、俺は直ぐに返答は出来なかった。

あの初めての友達を――クラインをはじまりの街で見捨てて此処へ辿り着いた俺に、彼と共に行動する資格などあるのだろうかと思いつたのだ。

しかしカインは俺の考えを読み取っていたのか、俺とパーティーを組もうとした訳ではなくただ単に、俺と共にリトルネペント狩りをしたいと言って来たのだ。

ソロでは一体の孤立しているモンスターにしか相手に出来ないが、二人もいれば同時に二体のモンスターと闘える。孤立しているモンスターを探す時間も減り一回の戦闘で倒せるモンスターの数も増える。《花つき》が現れる確率もまた、上昇する筈。

最初は彼が何か悪巧みをしているのかとも考えたが、彼が時折見

せたあの”笑顔”は如何しても”演技”には見えない——俺は知らずに、そう悟っていた。だからこそ彼と共にリトルネペントを狩りをしようと思い立ったのかもしれない……。

元βテスターではないと言うのに、彼は戦闘馴れしている部分があった。恐らくかつてこのSAOと似たMMORPGをプレイしていたのだろう。

リトルネペントのツタによる攻撃や緑色の腐蝕液も紙一重で避け、弱点部位のウツボ部分と茎の接合部分に槍を突き刺しては後退すると言うヒット&アウェイを行っていた。そして俺はカインが後退した直後に接近し、再び弱点部位を猛攻撃して撃破する行動を取っていた。気付けば自然にそれらの一連の行動が一つの連携パターンとなり、大した被弾も無くリトルネペントを次々に撃破していく。

しかしカインと出会って共にリトルネペント狩りを始めて約三十分が経ったが、未だに《花つき》は姿を現さない。通算十二匹目となるリトルネペントを倒しても尚、だ。

とその時、俺の耳に軽快でこの森のとは不釣り合いなファンファーレのBGMが響く。それと共に金色のライトエフェクトが身体全体を包み込んだ。

カインの方に視線を向けると、彼もまた俺と同じく身体全体をライトエフェクトが包んでいる。どうやら俺達二人は同タイミングで、初のレベル上げを成し遂げた様だ。

「漸くレベルアップか……一上げるのにこれだけ狩らなきゃいけないとは、先が辛そうだぜ」

「MMORPGで数体のモンスターを倒しただけでレベルが上がるなんて、得られる経験値が膨大でない限り有り得ないさ。それはそうと……おめでとう、カイン」

「……ああ、アリガトな。それにそっちこそ初のレベル上昇、おめ

でとう」

ニカツと笑うと共に言葉を放つカインに真面目に答えるのが恥ずかしくなった俺は視線を逸らし、紛らわす様に剣を納めてそくさとメインメニュー・ウィンドウ眼前に出した。レベルアップと共に加算されたステータスアップポイントを振るうとした瞬間――

不意にパンパンと、まるで手を叩いた様な音が響いた。

「ッ……………！！」

「ん？」

反射的に俺はその場から大きく飛び退き、剣の柄に手を掛けた。だがカインは呆けた声を出すだけで動く事はせず、音が放たれた方向に視線を向けるだけだった。

背後の警戒を怠っていた自分を呪うと共に、未だステータス・ウィンドウを触り続けるカインに後退しろと警告の言葉を放とうとした時に――――気付いた。

俺の視線の先に存在するのはモンスターでは無く、”人”である事に。

それはNPCではない。俺とカインと同じ、”プレイヤー”であった。

episode 4：闇夜の森（前編）（後書き）

コペル邂逅の直前で、前編終了です。会話の内容が殆どコペルの話と大差無かったのは作者の実力不足です。もっとオリジナリティを
考えなくては…………。

次回は後編。コペルとカインとキリトの三人に現る《花つき》の
トルネメント。

狩る為に闘い始めるキリトとカイン。しかしコペルは——と
言った内容ですw 先はもう分かるかと思いますが（汗
此処はカイン視点を中心に書いて行こうと思っています。

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

episodes・闇夜の森（中編）（前書き）

闇夜の中で冒険者は、^{プレイヤー}”現実”を知る。
そして——”裏切り”を知る。

episode 5：闇夜の森（中編）

——さあつてと、どれに振り分けるとするかなあ——

フレジー・ボワトルネベント

青猪や食虫植物もどきを数十体程撃破した所で漸くレベルが上昇——と言つてもたつたの一だが——した事に歓喜し、俺は心中で狂喜しながら早速メインメニュー・ウィンドウを眼前に映し出した。

普通のRPGではキャラのレベルが上昇すると、同時にステータスも上昇する。がしかしMMORPGだとレベル上昇時には《ステータスアップポイント》が与えられる。そして与えられたポイントの行先はプレイヤー自身が判断しなければならないのだ。このシステムだとプレイヤーは自分好みのキャラを創造出来る。例えば”パワー重視”なキャラを作りたいのであれば筋力を中心に振り分ければ良いし、”スピード重視”であれば敏捷力に振り分け続けて行けば良い。尤も俺の場合は片方のステータスだけを上げると言う極端な方法は好まない為、両方のステータスをなるべく均等に上げて行く事を以前のMMORPGから心掛けている。

幸い今現在振り分けられるステータスは《筋力》と《敏捷力》しかない。だが俺が良く購読しているゲーム情報誌によって得た情報によれば、このSAOには戦闘系・生産系のスキルがそれはもう大量にあるらしい。今は悩む必要は無いが、近い未来の俺はきつとどのステータスにポイントを振り分けるか悩んで一人唸り続けるだろう。

この先どんなスキルがあるのだろうか、と心中で呟きながら俺は与えられた3のポイントを筋力に2、敏捷力に1に振り分けた。

とその瞬間——パンパン、と何かを叩く様な音が突如として響き渡った。

「ッ………！！」
「ん？」

即座に反応したのはキリトの方だった。一瞬にして大きく後退し、警戒の為剣の柄に手を掛けている。それに対し俺はその彼の行動で何かあったと漸く気付き、恐る恐る背後を振り返った。

——人型モンスターだろうか？ それとも……

様々な思案が頭の中を過る最中、眼前に映し出されたのはモンスターでは無く——”人間”だった。

しかもNPCではない。俺やキリトと同じ、”プレイヤー”だ。

剣を抜いてはおらず、身体の前に二つの手を合わせたまま硬直する”少年”。ポカンと口を開けている所から察するに、先程の音に即座に対応したキリトの反応に驚いているのだろう。

俺とほぼ変わらぬ身長で防具は《はじまりの街》では見なかった革鎧。しかし武器はキリトと変わらずスモールソードの様だが……キリトの話によれば、この森の付近にある村にはスモールソードよりも威力の高い《ブロンズソード》が売っているらしい。何故それを買わなかったんだと問うと彼は冷静に、『威力はあっても、耐久度が低いからな』と当然の様に返していた。

もし彼がそれを知っており、尚且つ付近の村の存在を知っていたのであればきっと彼もまた——《元βテスター》なのかもしれない。迷って此処に辿り着いた俺とは違う、特別な人間の内の一人。

暫くの間三人の間には沈黙が支配していたが、キリトが警戒を解いたのか腕を下した。それと同時に硬直していた少年が俺達に頭を下げて来た。

「ご、ごめん…………脅かしたみたいで。最初に声を掛けるべきだったよ」

「…………。いや、俺こそごめん。反応が大袈裟過ぎた」

「俺は別に気にしてないぜ。ちょっとは驚いたけどな」

もじもじと俺と出会った時と同じ様にキリトは応じると、両手をコートのポケットに突っ込み視線を逸らした。至って普通の顔立ちをしている少年は俺達の返答にほっとしたのか笑顔を浮かべる。

「と、取り敢えず、レベルアップおめでとう。二人共随分と早いね」

賞賛の言葉を贈られた事に対し、俺は微笑を浮かべる。たった一レベル上昇しただけでも人から褒められるのは、やはり嬉しいものだ。

「それ程でもない…………ってね。まあこれまでお互い、結構ネベント狩ってたしな。なあキリト」

「あ、ああ…………。けどそれを言うなら、そっちも早いんだな。迷って此処に来たコイツとは違う誰かが此処に来るのは、まだ数時間後だと思ってた」

「いや、僕の方も一番乗りだと思ってたよ。此処の道、結構分かり辛いから」

キリトに”迷って此処に来たコイツ”と言われるのは無性に腹が立つが、実際事実であり、他人が目の前に居るこの場で言い争う気にもならない。

だがそれよりもやはり、眼前に立つ少年も《元βテスター》だった事は間違いなさそうだ。分かり辛いこの森の迷路を容易く看破した部分や、《ブロンズソード》ではなく初期武器のスモールソードを選択している部分からその真実を察する事が出来る。

「君も受けているんだろう？ 《森の秘薬》クエ」

少年の言葉にキリトは首をゆっくりと縦に振る。

これも先程、リトルネペント狩りをしていた時にキリトから聞いた話だが、キリトはこの《森の秘薬》と呼ばれるクエを受けているそう。そのクエの詳細な内容は教えてくれなかったが、キーアイテムである《リトルネペントの胚珠》を手に入れて依頼主に届けるのが目的。その為に《花つき》のリトルネペントをポップさせるべく、俺とキリトは先程までノーマルの方のリトルネペントを狩り続けていたのだ。

「あれは片手剣使いにとつての必須クエだからね。報酬の《アーニルブレード》は三層の迷宮区まで使える」

「へえ」。最初の第一層でも、そんな強力な片手剣が手に入るのか」

「まあな。けど……見た目がイマイチなのが難点だが」

キリトの言葉の真意を知っているのか、少年は明るく笑い声を出した。実物を見ていないのだが、二人の脳裏にはその《アーニルブレード》の姿が浮かび上がっているのだろう。

俺がどんな形状・色をしているのだろうと想像していた時、再び少年は口を開いた。

「——折角だから、クエ、協力してやらない？」

開いた言葉は俺がキリトに持ち掛けた言葉とほぼ同じ言葉。だが彼は俺とは違う。片手剣使いであり、ちゃんとクエの内容も知っている。逆に俺はキリトのリトルネメント狩りを手伝っているだけの存在。

チラつとキリトは視線を俺に向ける。俺にとってその視線は『如何する？』と俺に問い掛けて来ている様にしか思えなかった。俺はその視線に対しニツと笑うと、彼の代わりに口を開いた。

「なあ、それってパーティーを組もうって事なのか？」

「いや、別にパーティーを組みたい訳じゃないんだ。此処までやっていたのは君達二人なんだから、一つ目のキーアイテムは勿論譲る。そのまま狩り続けられ直ぐに二体目が出ると思うから、その時まで付き合ってくれたら良いんだけど……………」

「……………だそうだ。如何する、キリト」

「あ……………ああ、分かった。それなら、構わない……………」

歯切れ悪く答えるが、キリトは承諾してくれた。

その言葉を聞いた少年は直ぐに笑顔を浮かべ、まず俺の方へ右手を差し伸べて来た。

「有難う。じゃあ、暫く宜しく。僕は《コペル》」

「ああ、宜しく。俺は《カイン》」

俺は差し伸べられた手に快く応じ、即座に左手を出して固く握手した。

続けて少年——コペルはキリトの方にも手を差し伸べる。最初は戸惑った様子を垣間見せたキリトだったが、直ぐに左手を出した。

「……………よろしく。俺は《キリト》」

「キリト……………。あれ、どこかで聞き覚えが……………」

元βテスターであるコペルは、彼と同じく元βテスターである《キリト》の名を微かにだが知っている様だ。俺にとっては別に気にしない事だが、キリトにとってはそれが不味いと思ったのだろう。即座に出していた手を引つ込み視線を右方向へと移す。その方向に居るのは約三体ほど動いているリトルネペントのカーソル。

「きつと人違いだよ。さあ、さつさと狩り尽くそうぜ。他のプレイヤーが来る前に、《胚珠》を入手しないと」

「う……うん。そうだね。頑張ろうか」「へへっ、いいですとも！」

三人とも静かに頷き合い、俺とキリトとコペルの三人組は付近に存在していたリトルネペント向かって、猛然と駆け出した。

たった一人プレイヤーが増えただけなのに、リトルネペント狩りのスピードは二人の時以上に加速した。元βテスターであり、リトルネペントの挙動・攻撃パターンを知り尽くしているコペルとキリトが居れば当然の事なのだろうと感じてしまうが。

コペルが最初にネベントのタゲを取り、俺とキリトが弱点部位を全力で攻める連携パターンが何時の間にか生まれ、三人で続々と現れるネベントの群れを着実に撃破して行く。

狩り自体は何ら無駄なく進行して行くが、“普通の”会話は全く行われなかった。

誰かが口を開いてもそれはアイテムの話やクエストの概要等。誰一人として、この“現実”の話をしなかった。あの茅場の言葉をコ

ペルやキリトも耳にし、” 此処で死ねば現実の自分も死ぬ ” 事に疑問を持っている筈だ。なのに何故、俺達はそれを口にしないのか……。

思考しながらリトルネペントに向けて駆ける俺の脳裏に浮かぶ答えは、” 現実逃避 ” の四文字。

こうして闘い続けレベルを上げたり、《花つき》のリトルネペントが早くポップしないかと思考する全てが、現実逃避の一つ。HPバーがゼロになった瞬間にナーヴギアから発せられる電磁波によって脳が焼かれる終末に、俺達は目を逸らしているのだ。その終わりを紛らわすかの様に、その終わりから逃げる様にただ只管に、眼前に敷かれたレールの上を俺達は走り続けている。脱線したら最後、俺達を待つのは―― ” 死 ” 。

はじまりの街に残ったプレイヤーが通るレールの殆どは安全で安心出来る道。その場に踏み止まれば決して脱線する事は無く、時の流れに身を任せるだけで済む。

しかし――しかし、俺達はその真逆のレールを走り続けている。何時脱線するか分からない道を、恐れる事無く歩み続けている。眼前に映る死神^{モンスター}に対し槍を突き出し撃破しようとする俺は、本当の《死》から目を逸らして闘い続けている。

……いや、これは今だけの話ではない。きっと将来、この世界で俺は常にこの道を歩み続けて行くのだろう。何時来るか分からない、死の ” 脱線 ” に恐れを抱きながら。

思考の波が一段落した時、眼前に映っていたキリトのアバターの姿が一瞬、ほんの一瞬だけ止まった。スタンになった訳でもなく、ぴたりと身体が硬直したのだ。その時の状態はリトルネペントに対し剣を振り上げている状態。俺は即座に、動きを停止した彼に襲い

掛かるネベントに対し、両手銃単発剣技を発動させ、茎の部分を実
いた。途端にネベントの身体はポリゴンへと姿を変え、破砕音と共に爆散する。

「どうしたよ、キリト。動きが止まってたぞ」

「……………ああ、少し考え事してたんだ」

「ったく、そう言うのは余裕がある時にやってくれよな」

バツが悪そうに俯くキリトに対し、俺は苦笑の表情を浮かべる。
丁度その時、俺とキリトの背後で再びポリゴンの破砕音が響く。
もう一匹のネベントをコペルが撃破したのだろう。俺とキリトが振
り返ると、ふうと疲労の溜息を吐くコペルの姿が其処にあった。

「……………出不いね……………」

「全くだな。ったく、何時になったら出るのやら」

既に俺とキリト、そしてコペルがリトルネベント狩りを始めて既に
一時間は過ぎている。もう百体以上は倒したと言うのに、《花つ
き》は一向に姿を現さない。それに加え三人ともかなり疲労の色が
見える。武器の耐久力の関係もある為、これ以上戦闘を続けるのは
肉体的にも武器的にも厳しい。

「さっすがはレアモンスター……………と言っべきかな。MMORPGだ
けに当て嵌まる訳じゃないけど、もしかしたら知らぬ間に、物欲セ
ンサーが働いてるのかもな」

「それが本当なのかどうか知らないが……………多分βの時の出現率が多
少変更されているのかもしれないな。レアのドロッププレートとかは、
正式サービスで修正されるのはMMOじゃ良くある話だし……………」

「そうかもしれないね……………。如何しようか？ 武器も結構消耗して
るし、三人ともレベルはそれなりに上がったし、一度村に戻るのも

手かなと——」

とコペルが言い掛けた時、俺達から数十m程離れた大木に、一つ集束し始める赤い光。

四角のポリゴンブロックが幾つも生まれ、それ等が組み合わせ一つ一つの形を形成し始める。俺やキリト達の見慣れた光景の一つ——
——モンスターが湧出する際の一連の光景だ。

「「「……」」」

三人はその場に立ち尽くし、ただ黙ってその光景を眺め続ける。
また普通のリトルネペントだろうと予想していたが——現れたモンスターは、その予想を悉く打ち破る事になる。

大まかなリトルネペントの姿を形成させていたポリゴンブロックは徐々に繊細な姿となって行く。無数のツルが蠢かせながら動き始めるリトルネペント。汚らしい涎を獲物を捕らえ喰らう捕食器から垂らしている姿は、何度見ても好きにはなれない。

だが、その口の上にある物体が存在した。闇夜の森では一際目立つ”紅”の色をした何か。毒々しい紅の光を放つその正体は——
——《花》だった。

「「「……」」」

間違いない。あれが《花つき》だ。その真実は、元βテスターである二人の表情から容易に察する事が出来た。キリトとコペルが求める《リトルネペントの胚珠》を持つ唯一の個体、《花つき》のリトルネペントが、俺達の視線の向こうに存在している。

行動は素早かった。まるで獲物を見つけた鷹が空中から地面向けて急降下するかの如く、俺達はそれぞれの得物を握り締めると共に躍り掛かるうとするが——

だがその行動を、キリトが制止させた。突然身体を急停止させ彼の左に居たコペルに対し左手を挙げ、右に居た俺に対しては剣で止めて来た。

当然疑問の表情が俺とコペルに浮かぶが、キリトは冷静に左手の人差し指で段々と遠退いて行く《花つき》の背後を指す。しかしその場所には何も無く如何言う事だと詰め寄ろうとした時——俺にも見えた。ゆらゆらと口の上に大きな物体を動かしているリトルネペントが。

それがもし、二匹目の《花つき》であれば二人は大いに歓喜しただろう。唯でさえ湧出率の低い《花つき》が二体同時にポップすれば、大いに時間を短縮出来楽出来たからだ。

だが現実はその甘くない。口の上に物体があっても、それが《花》であれば意味が無いのだ。

そのリトルネペントの口の上にあるのは——《実》だ。限界まで膨らませた風船の如く膨れ上がっているその《実》を攻撃すれば、一瞬にして実は破裂し独特な臭いを解き放つ。その臭い自体は俺達に何かのステータス異常を与える事は無いが、エリア中のネペントが集結し襲い掛かってくると言う——キリトはそう、先程俺にレクチャーしてくれた。

俺達が協力すれば《実》を破裂させる事無く《花つき》を撃破する事も出来なくは無いだろう。だがそれは大きな博打と同義。もし《花つき》との戦闘中に《実つき》が参戦リンクした場合、無暗に攻撃する事は不可能だ。

「……どうする……」

苦悩した様に呟いたのは俺では無く、キリトの方だった。真っ直

ぐに一对となつて佇む《花つき》と《実つき》の二つの個体に視線を向け、苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべている。

此処で立ち止まっていたは標的が遠ざかってしまう。そう危惧した俺は打開策を考えようと持ち掛けようとした時、黙り続けていたコペルが不意に口を開いた。

「——行こう。僕が《実つき》のタゲを取る。その間にキリトとカインは《花つき》を倒してくれ」

言葉だけを告げて俺達の返答を聞く事無く、コペルは駆け出した。残されたキリトと俺は視線を合わせ、俺がしっかりと頷く。

「……………解った」「……………任せたぜ、コペル」

同タイミングで率先して動き出したコペルに、俺達は答えた。

コペルが上手く《実つき》の方を相手してくれれば、その間に俺達が《花つき》を撃破出来る。尤も、”上手く行けば”の話だが――。

最悪の結果を否定し、俺とキリトはコペルの後を追った。まず接近するコペルを《花つき》が察知し、涎を垂らしながら咆哮する。だがコペルはそれに怯む事無く右へ迂回し、《実つき》の方へと駆ける。

無視されても尚《花つき》は標的^{ターゲット}としている。徐々に近づく、俺達の存在も知らずに。

初手はキリトだった。右手に握り締めた片手剣を振り上げ、彼の存在に気付いていなかったネベントの茎の部分に直撃させる。不意打ちを食らったネベントのＨＰバーは当然減少し、同時にネベントはキリトの存在に気づき威嚇行為である二本のツルを高々と掲げた。この時点でネベントのターゲットはコペルからキリトへと変わった。

《花つき》と言っても、攻撃方法はノーマルの方と何ら変わりはない様だ。繰り出されるツタの猛攻を、キリトは回避したり弾いたりして直撃を免れる。そして反撃の一撃を与えた直ぐにバックステップ、後方に待機していた俺が、怯むネベントに全力の突きを繰り出す。

既にヤツのHPは黄色の域まで達している。この一撃で、ヤツは地に伏せる。自分自身に喝を入れ、俺はこのネベント狩りに最も多用し続け来た単発突き《スラスト》を放つ。ギュインと耳に響く効果音と目に見える漆黒の黒い線が虚空に刻まれると共に、槍の先端が茎を貫いた。

ノーマルとは違った断末魔を上げ、地面に落ちるネベントの捕食器。涎を撒き散らしながらごろりと転がり、東部に存在していた花がはらりと散る。その花から一つの球状の物体が転がって来る。それは地面に落としてバウンドするボールの如く何度も地面を跳ねて横に佇んでいたキリトの足元で停止した。

直後にネベントはポリゴンの塊と化し爆砕。キリトは足下に転がっている球状の物体を拾い上げる。あれこそがキリトとコペルが求めるキーアイテム——《リトルネベントの胚珠》なのだろう。俺はもつと、小さい物だと思っていたが……。

だがこれで終わった訳ではない。俺達よりも離れた場所であた一人、《実つき》のタゲを取り続け闘っているコペルが居る。援護に行かなくては彼の身が危ない。

「キリト！ 早くコペルの所へ！」

「ああ、分かってる！」

キリトに声を掛けると共に、俺はコペルの方へ視線を向けた。《実つき》の攻撃を剣と円盾で^{バックラー}あしらい続けるコペルの姿が視界に映る。βテストの時から防御が上手かったのか、此方に顔を向けてい

る。

だがその表情に苦痛の色は見えない。攻撃を繰り出すネベントに對して余裕なのか如何かは分からないが……彼の”視線”だけは、普通じゃなかった。

その視線はきつと俺だけじゃなくキリトにも向けられている。必死で闘う俺達を哀れむかの様な視線は、知らずに俺の心を震わせた。

——コペル……まさか、お前………！

最悪の予想が頭を過った瞬間と、コペルがネベントから繰り出されたツルを円盾で弾いた瞬間は重なった。そして彼の言葉から静かに発せられる、たった一言の言葉。

「——ごめん、キリト、カイン」

告げた瞬間、彼は再び視線をネベントへ向けた。そして剣を大きく振り上げた。刀身が薄い蒼に包まれた所から察するにあれば——ソードスキル。しかも振り下ろす先には、決して攻撃してはならぬ《実》。

「いや……だめだろ、それ……」

「やめろ……やめろよ、コペル………！」

キリトの言葉と共に、俺も動き出した彼を止めようと声を上げる。だが彼は動きを止めない。地面を蹴って繰り出すソードスキルを、ネベントの口の上にある《実》に、大打撃を与えた。

——パァァン！

突如、虚空に響く巨大風船が割れた様な音。それと共に実から放

たれる、薄い緑色の煙。

それと俺は知る。これが事故では無く意図的に引き起こした事であり、同時に、短い時の中で共に闘い続けて来た一人の少年が、俺達を裏切ったのだと……………。

episode 5：闇夜の森（中編）（後書き）

後編にするつもりが文が膨大になった為、急遽中編と言う形で更新する事になってしまいました（汗 申し訳ないです……。

次回で《はじまりの日》が終了です。

その後の話はオリジナル話で埋めようと思っております。

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

episode 6：闇夜の森（後編）（前書き）

闇夜の中で冒険者は、”現実”を知る。

そして—— ”裏切り”を知り、そして新たな”思い”を抱く。
その道に、果たして終わりはあるのだろうか……。

episode 6：闇夜の森（後編）

「——ごめん」

俺がさっきまで、《実》を叩き割る瞬間まで仲間だと信じていたコペルは、俺達の方角に振り向きもせずただ一言だけ呟いた。

如何してこんな事を！ と俺は直ぐに疑問と怒りが複雑に混じった糾弾の声を上げたかった。隣に居るキリトだって、少なくともそう思った筈だ。

だけど、今眼前に広がる現実が、俺の精神を狂わせる。

コペルの向こう側から幾つも幾つも現れる、カラー・カーソル。キリトとコペルの情報が正しければ、あれは先程周囲に放たれた独特な煙によって集結しようとしている、リトルネペントの大群だ。エリア中のリトルネペントの大半が此処へ向かって来ている。視界から判断するにその数、約三十体。

安全を確保するなら此処で逃走の選択肢を選ぶのが常套手段。しかし奴等の速度は侮れない。もし此処から逃走したとしても、直ぐに追いつかれる可能性が高い。

コペルなら《実》を割ればこうなると、理解していた筈だ。なら如何して？

元βテスターとしての知識が、彼の頭の中にはあった筈だ。なら何故こんな事を？

様々な憶測と疑惑が頭の中を幾度も過つては消失する。だけど本当に分からない。さっきまで共に闘い続けて来た仲間が、如何して俺達を裏切ったのか理解出来ない。一体何故……。

悩み続ける俺や隣に立ちぼんやりとコペルを見つめるキリトにも

視線を向ける事無く、コペルは直ぐ近くの藪へと飛び込んだ。その時一瞬だけ見えた表情の色に、絶望と恐怖の色は無かった。恐怖の波に呑み込まれる事無く、彼はまだ生きようと抗っている……。

「——無駄だよ……」

不意に呟いたのはキリトだ。意味を聞かなくともその言葉の真意は分かる。周囲を見渡せばありとあらゆる方向からリトルネペントが徐々に徐々に迫っている。この包囲網を抜けようと、敵と敵の間を潜り抜く事や県で押し切って行くのは——今のレベルでは——無理に等しい。しかしそれを知っている筈であろうコペルは立ち止まる素振りも無く進んで行く。まるで、確定的な自信があるかのように……。

とそう考えていた矢先、コペルのカーソルが突如として——
——消えた。

「なっ……消えた!？」

流石の俺でも、疑問の声を上げずにはいらなかった。

何かのアイテムを使い転移レポートしたのか、或いは何らかのスキルを使用しその恩恵を受けているのだろうか？

「——
——ハイディング《隠蔽》スキルの特特殊効果だ」

「——
——特殊、効果？」

冷静に俺の疑問に答えるキリト。聞き返すと彼は静かに頷き言葉を続ける。

「プレイヤーからはカーソルを消し、モンスターからはターゲット

にされない効果。コペルは二つ目のスキルスロットを空けてたんじやない。俺とカインに会う以前に、既にスキルを習得してたんだ。だからあの時背後に居たコペルに気付けなかったんだ……………」

「じ…………じゃあ、コペルが《実》を割ったのはただの事故じゃなくて、まさか……………」

元βテスターではない俺でも、MMORPGはこれまで幾度プレイしている。だからこそ《ハイドニング隠蔽》スキルを知って漸く理解出来た。コペルが如何して《実》を割り、俺達を置いて此処から逃亡したのかを。それは単純明快な事実……………」。

「俺達を、《MPK》で殺す気なのか……………？」

《MPK》——通称、”モンスター・プレイヤー・キル”。モンスターを使用して、自身の手を汚す事無く他プレイヤーを故意に殺害する行為を指す。

元来《PK》には二つの種類がある。一つは直接的に他者が他者を殺す場合。もう一つはモンスターを利用して他者を殺すMPKだ。このSAOに限定した事では無く、古いMMORPGからこの手段は存在していた。

人が集まれば社会ができる。それMMORPGでも同じ事。そしてその中での実利を求めて、あるいは感情的な理由から、他人を害する行為を行おうとする動機は常に、昔から存在している。コペルも例外ではない。

動機はキリトの持つ《胚珠》。今キリトは胚珠をポーチの中に入れている為、もし死ねばその場でドロップするのは明白な事実。コペルはそれを手に入れて村に戻り、クエストをクリアする……………。

「…………馬っ鹿野郎がッ」

遂に姿を現し始めたリトルネペントの大群が刻一刻と迫る中、俺は表情を強張らせ呟く。

——コペル…………お前は最初から自分の事だけを考えたんだな。生きる為に、生き延びる為に俺達を利用した。最初から協力する気なんて、一片も無かったんだな。

心中は怒りと憎悪で膨らんでいた。俺達を裏切り利用し、自分だけが生きようなどと…………許せる筈も無かった。

けど——隣に立つキリトは冷静な表情をしていた。まんまと”罠”に嵌められたと言うのに、静かに佇んでいるだけだ。

「——コペル…………知らないんだな」

不意にキリトは小声で呟いた。まるで、語り掛けるような口調で。

「ハイディング《隠蔽》スキルは確かに便利だ。だけど万能じゃない。一つだけ大きな《穴》があるんだ。あれは視覚以外の感覚を持つモンスターには、効果が薄いんだよ。…………リトルネペントが、良い例だ」

彼の言葉に偽りはない。その証拠に、リトルネペントの大群の一部がコペルが飛び込んだ藪の中へと進んで行く。その速度は凄まじい。幾らコペルでも引き離す事は不可能だ。

無言のままキリトは後方へと振り返った。前方のリトルネペントの大半はコペルの方へと進んで行くので数は前方程多くは無い。だがそれでも、此方に進むリトルネペントが存在するのもまた事実。

「——カイン」

キリトは振り向く事無く俺の名を呼んだ。それが何を意味するか、馬鹿な俺にだって直ぐに理解出来る。

「分かってる。——後ろは任せな」

「……………助かる」

互いに背中合わせの状態のまま、俺とキリトは迫り来るリトルネペントを真っ直ぐ見据える。

しっかりと握りしめるスピアの刃は購入した時よりも随分と汚れ、刃こぼれしている。長い柄の部分も傷が目立つ。この状態で大雑把な扱いをすれば、その瞬間にボキッと折れる事は確定的に明らかだ。故に放つ一撃は確実に弱点部位を狙い、その一撃で仕留めなくてはならない。もし出来なければ手痛いカウンターを受け——終^ジ了^{エンド}了。

最初の一匹が前方まで辿り着くと同時に、コペルが飛び込んだ藪の方向からリトルネペントの咆哮とコペルの咆哮が轟いた。きつとあちらでも闘いが始まったのだろう。

しかしもう、思い止まる事は出来ない。俺は再び槍を握りしめ、眼前に迫り来るリトルネペントの大群に全神経を集中させた。

あれから何体のリトルネペントを撃破したのか、何回《スラスト》を発動させたか、相手の繰り出す攻撃を何回避けたか……………この戦闘全ての詳細はきつと、後から思い出そうとしても決して思いだす事は無いだろう。

無駄な思考は決して抱えない。ただ只管に突き続き、ただ只管に攻撃を避ける。脳からアバターに送る命令はそれだけしかない。

ネペントの攻撃モーションを視認すればそれが何処に繰り出されるかを予測し、放たれる攻撃を最小限に避け、カウンターの《ラスト》で弱点部位を穿つ。

だがそれでも、完全に避け続ける事は不可能だ。ツルがジツと掠る時もあり、巨大な口から放たれる腐蝕液が地面に着弾すると共に飛沫が舞い、その一部が身体の至る部分に直撃する。それと同時にじわりじわりと減る、俺の命^{HP}。

——死にたくはない。

そう、死にたくはない。いや、死ぬ^{死ぬ}訳にはいかない。

”本当^{リアル}の現実”に還らずにこの”偽^{ゲーム}りの現実”で死ぬ事は真つ平御免だ。それに大切な家族……珪子^{シリカ}を残して、此処から《ログアウト》するなど考えられない。

だから俺は闘っている。生きる為に、此処から絶対に生き延びて還る為に、槍を握りしめて精一杯の力を込めて突きを放ち続ける。躊躇や迷い等、一切ありはしない。

だが……”これ”は何だ？ 心の奥底からじわじわと溢れて来る、”この感情”は。この様な絶体絶命の状況下で、一体何の”感情”を抱くのだろうか？

これは……”恐怖”？ ”絶望”？ 違う……これはもっと単純な……楽観的な”感情”……。

——まさか、”幸福感”？

このゲームを始めた事に後悔しながら、先程まで”現実逃避”の如くネペントを狩り続けていた俺は、この様な生と死の淵で、”幸福”を感じているのか？

いや、違う。俺は——”満足”しているのだ。

握る槍は”偽りの現実”の中では本物。身体は偽りの姿でも此処ではそれが真の姿。この身体は現実リアルとは違う、この世界での”現身うつしみ”。闘う毎に学習し、武器も強化すれば敵も屠れる。そして——
——もつともつと、強くなれる。

その時に気が付いた。俺はただ我武者羅にこの世界で”生きよう”とした訳じゃないと。

俺はこの世界で”生きて”、そして”強くなりたい”んだと。更なる高みを、己の限界を超えたいと。

知らぬ間に俺は、一種の強迫観念に囚われていた。だけど嫌な気分じゃない。確かにレールを脱線すればその先に待つのは”死”だが、脱線しなければ、レールが続く限り突き進んでいく。

その道が終わるのはきつと——ゲームクリア”この現実が終わる時”となつた瞬間だろう……。

「だ……ああああああ!!」

”必ず生きて、そして強くなる”。

ただ”生きる事”から昇華した新たな思いを抱きながら、俺は全力の《スラスト》を放つ。

漆黒の線が虚空に刻まれる直前にはもう、ネプントの捕食器は地面に崩れ落ちていた。そして殺気立ちながら新たなネプントを視認しようとする索敵を開始した瞬間——突如耳に響く、ポリゴンの破砕音。

しかしモンスターの破砕音とは違う、鋭い破砕音だった。モンスターではないとしたら、考えられるのはただ一つ——

「……………」

声を上げなければ、その破砕音があつた場所へ駆け寄り事もしな

い。

破碎音を耳にした直後に、眼前現れたネペントを撃破した所で漸く俺は構えを解き、その破碎音があった場所へ視線を向ける。

藪の中から現れる七対のネペント。それ以外のモンスターの姿は無い。当然、プレイヤーの姿も。

「――お疲れ」

俺の隣に佇み、俺が向けていた場所に視線を向けたキリトは小さく呟いた。その言葉は俺に向けてではなく、一人のプレイヤー――
――コペルに向けての言葉だと理解するのは、ほんの一瞬で充分だった。

そう、彼は生き残る為に俺達を騙し利用し、そしてネペントと闘い、“死んだ”。同時に彼を操っていた一人の人間もまた、ナーヴギアによって脳を焼き切られる“処刑”を受けたのだろう。尤も、それを確かめる術等ありはしないが。

最初に比べてネペントの大群は、大分個数が減っていた。このまま逃走を図る事も不可能ではないが――隣に立つキリトは、その様な素振りを見せはしない。かく言う俺も、このまま逃げるのは惜しいと感じ、その場に踏み止まった。

俺とキリトの視界の先に映る物はきつと同じだ。頭の上に真つ赤な《花》を咲かすネペントを、俺達は見ている。

二体目の《花つき》のネペント――裏切りなどせず、俺達と共に地道に乱獲を続けていたらきつと、コペルも自身の《胚珠》を得たに違いないだろう。しかし今更俺が如何思っても、それを選んだのは彼自身。全ては彼が選んだ事なのだ。

HPは二人とも少ない。カウンターを受ければ即死のHPだ。
しかし俺とキリトの表情に焦りや恐怖の色で染まる事は無い。腐

蝕液を放とうとしている二体のネペントを前に俺達は駆け出し、ほぼ同時に二体を撃破。

そして僅か数十秒で残る五体を撃破し、戦闘を終えた。

コペルが《ログアウト》した場所にはまるで遺品の如く、スモールソードと円盾が転がっていた。ほんの数分前までコペルと言うキラクターはこれを装備し闘っていた。最後の時まで、”生きる事を諦めずに”。

キリトと俺はその剣と円盾を運び、周囲の木々の中で最も大きな樹木の根元に突き刺した。そしてその剣の近くに、彼が欲していた《胚珠》を置いた。

「お前のだ、コペル」

「……それ持ってゆっくり休みなよ、コペル」

告げると共に、キリトは屈んでいた身体を起こし踵を返す。

そのぼろぼろになった背を目にしながら、俺は黙って後を追った。

「凄いな……それが報酬武器か」

「ああ……」

あれから数十分後。モンスターとも遭遇する事無く、俺とキリトは村——ホルンカの村と言うらしい——に辿り着いた。村の中央には既に他のプレイヤー達——恐らく元βテスターだろう——もおり、俺とキリトは気付かれない様に依頼主の居る家へと向かった。

家には一人の女性が何かをグツグツと煮込んでおり、キリトはその女性に《リトルネペントの胚珠》を差し出した。何度も何度も女性性は頭を下げた後、彼女は報酬武器である片手剣をキリトに授けたのだ。

その剣は見るからに重量がありそうだった。紅の鞘に包まれたそれは見事な存在感を醸し出していた。片手剣にはあまり興味の無い俺だが、一瞬欲しいと思ってしまった程だ。

そのままキリトはこの家を飛び出して行くのかと予想していたが、彼は直ぐ近くにあった椅子に座りこんだ。恐らく先程の戦闘で、かなりの気力を削ってしまったのだろう……俺も彼の隣の椅子に座り、疲労に支配された身体を休める。眼前では今も尚、この家の主である一人の女性が何かをグツグツ煮込んでいる。

「……なあキリト。あれ何を煮込んでるんだ？」

「確か……市販の薬草を煎じてるらしい。何でも、娘を病気から治す為に。だけどそれでも治らなかったから、あの《胚珠》が必要だったそうだ」

「……成程」

俺と同じく疲労困憊の状態であるキリトに、先程彼が受けていたクエ《森の秘薬》の概要を教えて貰うと、視線の先で薬を煎じていた女性の挙動が変わった。木製のコップを取り出し、それに鍋の中身をおたまで注いだのだ。

ほのかに湯気が立つそれを女性は大事にそうに持つと、奥のドアへと向かって行った。

するとキリトは無言のまま立ち上がり、その方向へと歩き始めた。如何してあの女性の後を着いて行こうと彼が思ったのかは理解出来ないが、一人此処に残るのも何だか疎外された気分になる為、俺も立ち上がりキリトの後を追った。

女性が開いたドアの向こうにあったのは、一つの小部屋だった。壁際にはタンス、窓際にはベッドしかない。誰かの寝室である事には間違いなさそうだ。

そのベッドに横たわるのは、顔色の悪い少女ただ一人。あの子がこの女性の娘で、病気を患っている本人だろう。母である女性の手によってゆっくりと起きる少女。キリトはベッドの傍に立っているが、クエをクリアしていない俺はキリトよりもやや距離を置いて、壁に凭れ掛つて腕を組み、事の行く末を見届ける。

「アガサ。ほら、旅の剣士様が森から薬を取って来て下さったわよ。これを飲めば、きっと良くなるわ」

「……………うん」

年相応の可愛い声と共に差し出されたコップを受け取り、両手でそれを支えながらゆっくりと飲み干す。飲み干した瞬間に彼女の顔は一気に太陽の如く輝き、病気だったのが嘘の様に元氣潑刺になる——等と言う、まるで童話のオチの様な展開にはならなかった。だけど僅かだが、彼女の顔には輝きが戻っている様にも見えた。

そして少女はコップを女性に渡すと、キリトの方へと視線を向け、小さな口で感謝の言葉を紡いだ。

「ありがとう、お兄ちゃん……………」

「……………」

彼女の感謝の言葉に対しキリトは何の言葉も返さず、それどころか大きく両目を見開いた。

お礼の一言ぐらい言ったら如何なんだ、と言おうとした瞬間、彼の身体は大きくよろけ、ベッドに両手を置くとそのまま床に膝を着いたのだ。慌てて俺はキリトに駆け寄る。

「ど、如何したんだキリト。いきなりお前……………」

問いには答えない。代わりにただ低い声を漏らし、全身を震わせ続けるだけだ。

コペルの裏切りにも慌てる事無く冷静に対処した彼が、突如として悲しみの感情に包まれたのか——それはきっと、先程のアカサの言葉が原因だ。あの『お兄ちゃん』と言う言葉……………。

これは憶測だが、もしかしたらリアルなキリトには弟が妹が居るのだろう。でなければ、先程の言葉に対してこのような反応を見せる事は無い。そして思ったのだ、その子に“会いたい”のだと。俺も珪子^{シリカ}が居るから、その衝動は痛い程良く分かる。“大切な人に会いたい”と言う衝動は、この世界に閉じ込められた人間ならば誰だっと思う筈だろう……………。

「……………」どうしたの、お兄ちゃん？」

無垢なる声でアカサは呟き、小さな掌でキリトの頭を撫で始めた。何度も何度も。俺はその光景をすぐ傍で見守り続けた。キリトが泣き止むまで、ずっと——。

「——気は済んだか？」

「ああ……えっと……」

「心配しなくても、お前が泣いてた理由を問い詰めるつもりはないよ。大体予想はつくからさ」

「………すまない」

「謝るなつて。誰だつて、悲しい時には泣くもんだ。それが人間の本質だからな」

アガサの家から出た俺とキリトは、村のはずれの野原に佇んでいた。

キリトは暗い表情のまま、体育座りで俯いている。対し俺は大字で横たわり、上空を見上げていた。

「……お前も会いたいんだな、家族に」

「……ああ、会いたい。今直ぐ……会いたい」

「俺も会いたい。母さんに、親父に、そして——
——リアル現実の妹に会いたい」

「え……？ リアル……？」

俺の現実リアルと言う単語に疑問を持ったキリトは、すぐさま俺に問い掛けてくる。

「実はさ」俺は起き上り、キリトの方に顔を向ける。「このゲーム、妹と一緒にダイブしてるんだ」

「妹……妹さんと、一緒に？」

「ああ。二人で喜んでこのゲームをプレイした直後にこれだ。もう帰れないって言われてアイツ、泣き出すからさ………凄く後悔して

んだ。こんなに妹を悲しませるなら買わなきゃ良かった、って」
「……………」

今の俺の気持ちを吐露し、遣る瀬無い気持ちを紛らかす様に俺はまた上空を仰いだ。

すると「……俺も」と、キリトは不意に言葉を紡いだ。

「俺も、妹が居るんだ。まあ、従妹なんだけど……………」

「成程ね……………」じゃあさっきのあれは、あの子の言葉を前に言われたんだな。その妹さんに」

「……………ああ」

そう告げるとキリトは再び黙り込んでしまった。心中でその妹さんの姿を、思い浮かべているのかもしれない。だとしたらこのままこの話題を続けると、更に彼を悲しみに染めてしまうと感じた。

何か話題を変えようと必死に模索した結果——一つの言葉が、勝手に口から飛び出した。

「——なあキリト。もし良かったら……………」友達”にならないか？」

またしても俺はしまった、と心の中で後悔した。初めてキリトと出会い彼に着いて行く事になったのも、口から出てしまった突拍子も無い言葉が原因だった。それを二度も繰り返すとは……………。

当然キリトは俺の方を向いて怪訝そうな表情を浮かべた。俺は慌てながら言葉を続ける。

「い、いや、此処でお別れってのはあまりにも寂しいし、せめて相互でフレ登録しようかーと思ったんだが……………駄目か？」

「……………」

やはり直ぐに答えは返っては来ない。あの時は一人でも多い方が効率が良かった為に承諾してくれたが、今回に限ってはそう上手くはいかないだろう。

心中で諦め始めた時、キリトは小さく笑うと共に口を開いた。

「……良いよ。色々とかインには世話になったし、その……お前と居ると楽しそうだな、って思えたから」

「…………。マジで？」

「ああ、嘘なんかじゃない。マジ、だ」

そう言ってキリトは、右手を差し出して来る。それが握手を求める合図だと理解した俺はすぐさま左手を差し伸ばし、固く握り合った。

「……お互いに妹を持つ同士、宜しくな。キリト」

「いや、だからこっちは従妹だって。…………まあ、宜しく。カイン」

こうして俺とキリトは、”友達”になった。

だけど俺はこの時から薄々と感じていた。この関係が何れ、”親友”にまで発展する事を…………。

こうして俺の、この”偽りの世界”^{SAO}での最初の一日は、衝撃的な出来事の連続で始まり、最後は静かに幕を閉じた。

明日も始まる。俺の、この世界での”物語”が…………。

episode 6：闇夜の森（後編）（後書き）

これで《はじまりの日》が終了です。

次回は一層攻略の場面にしようかと考えていますが……他のSAO二次作者様と内容が被ってしまうのでは、と思い色々悩んでいます
（汗）

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

PS；

もしかしたら、あの『謙虚なナイト』で有名な人を出すかもしれません（え

episode 7：一時の安息（前編）（前書き）

”家族を思う事”——それは家族を持つ者ならば誰もが抱く事。
兄が妹を思う事も、決して例外ではない。

episode 7：一時の安息（前編）

あの日——この世界が始まった日から、翌日。窓の外から差し込む太陽の光に眩しさを感じた俺は、ゆっくりと瞼を開けた。今現在の時刻は……七時頃。

昨日の夜生と死の狭間に立たされ死闘を繰り広げ結果、身体には想像も絶する程の疲労感が押し掛かっていた。しかし今は如何だろう。昨日の出来事が嘘の様に疲労は吹っ飛び、代わりに安心する程に心地よい。

立ち上がり、固まった体を解す為に一度大きく伸びをした後に俺はふと、視界を背後に移した。其処にはベッドに凭れ掛って寝ていた俺とは違い、古びたベッドに横たわり静かな寝息を漏らす少年——キリトの姿。

俺とキリトが”友達”になった後、俺達は身体に溜まった疲労を癒す為にこの村 《ホルンカ》に唯一存在する小さな宿屋へと向かった。本当はそれぞれ個室で一夜を過ごす心算だったが、生憎先客のプレイヤーが居る為に空いている部屋が一つしかなかったのだ。この現状に対してキリトは冷静に『俺は外で寝るよ』と言って来た為、『それなら一緒に寝ようぜ』とすぐさま俺は提案した。だがキリトは最初は遠慮していた。きつと俺の為を思っ言っているのだろう、彼自身も疲れているのだ。彼を外に追い出して俺だけ部屋を独占して一夜を過ごす気等、更々無かった。最終的には半ば無理やり、彼を部屋に引き摺り込んだ。

しかし部屋に入っても肝心のベットは一つ。此処でもまたキリトは『カインが寝て良いよ』と言い出すので反射的に『いや、キリトが寝ろよ』とまたもや返してしまった。最初はまるで古いコントの如く互いに譲り合いを繰り返していたが、最後は昔から伝わる平等

に決める方法の一つ、『じゃんけん』を行使。結果キリトが勝ち俺は負けてしまった為キリトは一人ベットを独占し、俺はベットに凭れ掛る様にして寝た訳なのだ。

「……………」

今俺の目の前には無防備に眠り続けるキリトの姿がある。朝日の光が差し込んでいると言うのに、その瞼が開く気配は一向にない。もし此処に油性ペンがあれば額に『肉』と書き込んでやりたい所だ。しかしずっと彼の顔を見続けていると……………一つの感想が心中で生まれた。

（……………もしキリトがロングヘアとかしたら、絶対”女”って思われそうだな……………）

今の彼の髪型は短髪だ。しかし頭の中で彼のロングヘアを想像してみると……………ホント女性にしか思えない。その理由の殆どは、顔立ちが女性に似ているからか。所謂……………”男の娘”？

勿論、俺はその”系統”に関しては興味が無い。絶対に、絶対にだ。

「ん……………」

俺が絶対本人の目の前では言えそうに無い事を妄想していると、その本人がゆっくりと瞼を開いた。幾度か瞬きをすると、ゆっくりと俺の方へ視線を向けた。

「……………。ああ、カインか。おはよう」

「（最初の間は一体……………？）おう、おはよう」

数瞬だけ俺の顔を凝視した事に少しばかり疑問を感じたが、俺は笑顔で口を開いた。

「さて、と。今日も一日頑張ろうぜキリト！」

「それは構わないけど……カイン、お前の槍の耐久値、大丈夫なのか？」

「へ？……あ」

宿屋から出ていざレベル上げへ！ と一人で昂っていた時、キリトの冷静な言葉が俺の昂っていた精神を一気に消沈させた。そう、俺の両手槍 《スピア》 の耐久値は依然減っていたままなのだ。

宿屋で一夜を過ごす携える武器の耐久値も回復する――

なんて上手い事はない。耐久値を回復する為には態々鍛冶屋に赴き、金を払って研磨して貰わなければならない。と言ってもこれはMMORPGでは良くある仕様だ。此処の所、ただストーリーに沿って街や村を転々とするだけの家庭用RPGばかりやっていたから忘れていたが。

まだ初期武器のままの俺だが、キリトは違う。昨日受けたクエ《森の秘薬》の報酬武器として一本の顔を片手剣 《アーニルブレード》を手に入れている。先祖伝来の長剣らしいが、耐久値は全く減っていない。逆に俺の両手槍あいぼうの耐久値は既に半分を切っている。

「すっかり忘れてたぜ……武器屋に行けば大丈夫かな？」

「ああ。まあ鍛冶屋なら《はじまりの街》にもあるけど……如何する？」

「そっか。なら……」

手っ取り早く此処の武器屋で研磨して貰うかと考えていた時、不意に《はじまりの街》と言う言葉が頭に引っ掛かった。そしてその言葉から連想される一人の人物の姿。蹲ってすすり泣く、あの子は

「——珪子……」

「……カイン？」

「へっ？ あ、ああいや……」

言葉でそう返しても、心中にはシリカの姿が浮かび続けて消える事は無い。

今アイツは何をしているのか。今も尚《はじまりの街》の中に居るのか。ちゃんと——”生きているのか”。様々な不安が頭の中に浮かんでは消え、その度に俺の心は締め付けられる。

まだ……あれから一日しか経っていない。だけどアイツはこの世界でのたった一人の”家族”。失えば……俺は——

「……悪いキリト。俺一旦、街に戻るよ」

またしても俺の口は勝手に、言葉を紡いでいた。

”何か思えば直ぐ口に出す”——俺の昔からの悪い癖だ。キリトと初めて会って同行した際も、キリトと”友達”になろうと言い出したのはこの癖が発端だ。尤も、その癖があるからこそ俺は今此処に居るのだが。

俺の言葉にキリトは疑問の表情を浮かべる。恐らく、俺の性格から察して直ぐに村の武器屋に向かうだろうと踏んでいたのだろう。

「別に此処で……いや、カインの決めた事だ。俺が如何こう

言う訳にはいかないな」

「……………」

意外だった。俺は理由を問われるとだけ思っていたのに、キリトが返した言葉は承諾の言葉。

何故彼は問い詰めなかったのか……………何の確信も無いただの憶測だが、キリトは分かっていたのかもしれない。俺の、『珪子』と言う咳きから、俺の考えを……………。

「ほら、さつさとして来いよ。此処から街まで結構距離あるんだからな」

「あ、ああ……………。終わったらメールする！」

不自然なまでに急かすキリトの言葉は、『早く妹に会いに行つて来い』と言う一つの暗示なのかどうかは定かではない。だけど今は素直にその言葉に甘えよう。俺はキリトに背を向け猛然と村の出入り口の門へ向けて走り出した。

出入り口の門に辿り着き鬱蒼と茂る森を前にした時、背後を振り返った。視線の先には微笑を浮かべながら小さく手を振るキリトの姿。

「……………有難う、キリト」

俺の為に気遣ってくれた”友人”に一言だけ呟くと、俺は視線を戻して森の中へと飛び込んだ……………。

「……………行つたか」

カインを見送った後、一人残された俺はポツリと呟く。

あの時カインが言った《珪子》と言う名前——あの名はきつと、昨日の夜カインが話していたアイツの”妹”の名前に違いない。だから俺の《はじまりの街》に反応して言葉を止め、街へ戻ると言つたのだ。

兄が妹を思う……………それは当たり前的事だろう。母が子を心配するように、兄が妹を心配するのは何ら不思議な事ではない。”血の繋がった”仲ならば……………。

「俺は……………どうだろ……………」

妹……………直葉は本当の”妹”ではない。”従妹”なのだ。生まれた時から共に育つて来たが、それでも血は繋がっていない。けど彼女はその事実を知らない。それを良い事に俺は知らぬ内に、距離を作っていた。顔を合わせるのも避けていたぐらいに。

もし……………もし、俺もカインと同じ様に妹と共にこのゲームをプレイしていたら、妹が居る場所にこのこと会いに行けるだろうか？ いや、それは絶対に出来ない。妹と距離を置き続けた俺にそんな資格は無い。手の平返したように接する事なんて、出来ない……………。

「——色んな意味で、お前が羨ましいよ。カイン……………」

自分の事よりも”家族”の事を考え行動するカインに、俺は敬意を称しなくてはならない。

本来俺も彼の様にしなくてはいけないのだ。彼のように妹の事を考え、しっかりと向き合う事が出来なければならないのだ。でも今までの俺は真逆だった。”血が繋がっていない”——それを理由

として避け続けていた。

だからこそ俺は、

「きちんと……向き合わなきゃな」

生きて還つて、ちゃんと向き合つて妹の名を——《スグ》と呼ばなくては。静かに決意し、俺は出入り口の門へと進み始めた。

＊

《はじまりの街》——それは全てのはじまりとなる街。この世界に降り立った全てのプレイヤーが此処から自身の物語を始める。だが皮肉にも、この街は俺達に“絶望”を送り届けた。一人の天才プログラマー——茅場晶彦を現出させて。

キリトに街へ戻ると告げ此処まで来るのに然程時間は掛からなかった。ただ珪子に会いに行く事だけを抱き無我夢中で走り続けていたら、直ぐに辿り着いてしまったのだ。“思い”とは意外と恐ろしい物だと改めて実感してしまう。

ゲートを潜り抜けると其処には大量のプレイヤーが溢れ返り街は活気付いてる——事は無かった。街の軽快なBGMが鳴り響き人も行き交いしているが、それは所詮“偽りの存在”に過ぎない。BGMはシステムによって設定されたものであり、行き交う人もプログラムされた存在^{ひと}、《NPC》に過ぎないのだ。意思を持ち行動

し、生きようとする《プレイヤー》の姿は………殆ど無い。

「——まあ、あれからたった一日しか経って無いから、当たり前か」

この世界の創造主、茅場のはじまりと絶望の言葉が言い放たれてまだ一日。この世界から脱出しようと決意し行動する者達は、今現在だとこの世界の知識を多少なり得ている《元βテスター》だろう。（俺の様に例外も存在するが）

きつと殆どのプレイヤーが茅場の言葉を信じていないのだ。”待つていれば何時かは助かる”——そう信じ続けているに違いない。

そんな人達がのこのことフィールドに出て行くとは思えない。幾ら弱いモンスターでもそれは自身の命を奪う”死神”。少しでも焦り、恐慌状態に陥れば死神の容赦ない攻撃が降り注ぎ、HPバーを奪い去る。殆どのプレイヤー達はその結末を迎える事を恐れているのだ。この世界の知識と技術を知る、元βテスターを除いて………。

なら此処に居ないプレイヤー達は一体何処に居るのか。それは至極簡単な事だ。きつと安い宿屋で何時か還れる事を夢見ながら、同時に死の恐怖に怯えながら部屋に籠っているのだろう。幸いこの街は意外と広い。宿屋も幾つか点在する為、一万にも及ぶプレイヤーを収納出来るのは容易い事だろう。

そして妹も………珪子も、その宿屋の一室で信じ続けているのだろう。何時か還れるその時を——

「……………」

大切な妹の姿を思い浮かべながらゲートの前に立ち其処から見える街を見据えながら俺は、再び《はじまりの街》へ足を踏み入れよ

うとする——のだが、

「——どいたどいたあああ!!」

「……ん？ 何だいったウボアアア!!」

突如背後から響く怒号に気付き、振り返ろうとした瞬間にアバターの身体全体に伝わる衝撃。背後から一方的に加えられた衝撃によって俺の身体は一瞬宙へと浮き、そして一瞬にして地面へとうつ伏せのままダイブする。地面が石畳の所為か、森で転んだ時以上に痛い。

だがそんな事は如何でも良い。俺は誰かにぶつかられ、こうなったのだ。その誰かを知る権利が、今の俺にはある筈だ……!

「痛つつつ……おい誰だ! ぶつかったのは!」

「うつせーなあ……ただぶつかったただけだろ」

倒れたまま背後に視線を向けると、其処には面倒臭そうな表情を浮かべる”少女”が居た。

口調から男だと一瞬思ったが、男性とは思えない高い声でやや褐色の肌に茶色の髪色をしたセミロングの人間を、”男性”と思う事等到底出来ない。防具は《はじまりの街》で購入出来る革鎧で見た目はシリカと同じくらいの、12歳程に見える。

「ぶつかっただけって……」彼女の言葉に多少憤りを感じた俺は、顔に伝う痛みも忘れて立ち上がり少女の方へ顔を向けた。視線の向こうに映る少女は偉そうに仁王立ちのまま俺を睨み付けている。……ぶつかって来たのはそっちだと言うのに。

「……謝ろうつて意思是、君には無いのか?」

「だからぶつかったただけだろ? 別にそんな力ツカする事じゃない

じゃんか」

「別に力ツカしてないけどさ…………俺としては、一言でも謝ってくれたらそれで…………」

本当は勢い良く吹っ飛ばされて石畳に顔面をぶつけた事により結構憤りを感じているのだが、自身よりも年下に”見える”子にキレる程短気ではない。あくまでも冷静に言葉投げ掛ける。

少女はうーんと、可愛く首を傾げたまま俺の隣を横切って行く。そして少女は暫く歩き続けた後、クルツと一回転して此方を見つめるとニカツと笑い、

「何か面倒だから今度にするぜ。じゃあな！ ガリの兄ちゃん！！」
「ガッ……………?!」

衝撃的な言葉を言い残した彼女は再び視線を前方へと向けると、そのまま一目散に駆け出していった。その速度は凄まじく、行きかうNPCの間をアメフト選手の如く避け続け、一瞬にして俺の視界から消え去ってしまった。

しかし、しかしそれよりも衝撃だったのはやはり、

「ガリ……………。ガリの、兄ちゃん…………」

妹にですら言われた事の無かった言葉をポツポツと呟きながら、俺は暫くその場に立ち尽くしていた。大切な妹に会いに行く事も忘れて…………。

episode 7：一時の安息（前編）（後書き）

今回はカインシスコンとガリ疑惑（？）な話でした（オイ

シスコンなのは置いといて、ガリについては完全ネタですねw 「

竜騎士と言つたら……」真っ先に挙げられるのがこれと「裏切りキ
ヤラ」ですねw こちらのカインは裏切らせたくないのですが（汗

そして今回最後に出て来たお転婆天衣無縫娘。一応ヒロイン候補で
す（お

と言つてもこれもあるFFキャラが元ネタなのですがw

次回は後編、シリカとカイン中心の話になります。お転婆天衣無縫
娘もまた出す予定です（え

ともかく、次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャンプ}！

PS；

果たして武器の研磨は鍛冶屋限定では無く、武器屋でも出来るのだ
ろうかと小一時間。

episode：一時の安息（後編）（前書き）

”生きる事”——それは全ての人が持つ”意志”。
しかしその意志の内容は、人によって違^{SAO}うのもまた事実。
この偽りの現実でも、例外ではない——。

episode 8：一時の安息（後編）

あの天衣無縫な女の子と遭遇し衝撃を受けまくった後、気を取り直して俺は再び歩き始めた。向かう先は一つ、妹^{シリカ}の居る宿屋だ。

場所が何処は良く覚えていいる。街の中央にあった広場から直ぐ南——二階建ての小さな宿屋だ。あの時、茅場晶彦の放った絶望の言葉を聞いて意識を手放した俺は無我夢中で走り出し、人混みを掻き分けながら突き進んだ際に目に入ったのが、その宿屋だった。アイツが落ち着ける場所を確保する為にも俺は一片の迷いなく其処へ突っ込んだ。

外では未だに茅場の絶望の演説が続いていた為、客は一人として居なかったのが幸いだった。すぐさま二階の小部屋を選び、古びたベットにシリカを寝かせたのだった。

「……今頃、何してんのかな。シリカ」

外で金^{コル}を稼いでいる、とは思えなかった。アイツは気の強い部分もあるが、同時に寂しがり屋な部分もある。その性格がS A O^{此処}に来て変わる訳がない。いや、もっと悪化しているのではないかと思う。この先の未来、自身の歩む事となるこれからの道……多くの様々な”不安”がアイツに押し掛かっている筈だ。それに耐えられる程の精神をアイツは……きつと持ってはいない。

「……………」

もしそうならば俺は如何する？ 俺はアイツの為に、何が出来る？ 俺は——如何すれば良い？

大切な妹^{シリカ}に対して兄である俺は何をすれば良いのか——悩みながら俺は、静かに歩き続けた。

中央広場にもやはり、プレイヤーの姿は殆ど無い。初めてロゲインした際にはまるでお祭りの様にプレイヤー達が集まり、歓喜の表情を浮かべたり他のプレイヤーと嬉しそうに話していた光景は既に夢幻と消えている。広場の所々にNPCが経営する露店の様な店が幾つか点在していたが、俺は何処にも寄る事無く南の宿屋へと向かった。

宿屋に入ると「いらっしやいませ」とカウンターに立つNPCが丁寧な言葉で挨拶してくる。言葉と声だけでは人と同じだが、中身はプログラムされたデータの塊……そう心中で考えながら、俺は此処に泊まっている人に会いに来たと返した。

シリカが泊まっている部屋は二階の一室だ。特に障害物も無い為窓から広場を一望出来る良い部屋。尤も、今は”偽りの現実^{SAO}”の風景を見て感傷に浸る程の余裕はないのだが……。

古びた階段を上り、廊下の突き当りに位置する木製のドアをノックする。本来ならば部屋の向こうに居る人の承諾があつてから入るのがマナーなのだが、俺は答えを待たずに部屋を開けた。

西洋映画のワンシーンで映し出される様な古びて質素な部屋。家具はベットと傍らにある椅子とライトだけ。そしてそのベットの上に妹が——シリカが、静かな寝息を立てながら眠っていた。

「……………まーだ寝てるなんて、とんだお寝坊さんだな」

呟いて、俺は椅子に腰掛けた。眼前には現実と全く変わらない顔つきのまま眠り続ける妹の姿がある。だが、この世界でシリカの寝

顔を見たのはこれが初めてではない。

あの茅場の演説の最中に抜け出し此处へシリカを連れて来た俺は、シリカをベットに寝かせた後窓から広場の様子を見続けていた。話が暫く続くと、突如プレイヤー達が下を向き始めた。一体その視線の先には何があるのだろうかとうと目を凝らすと、その先にあつたのは《手鏡》だった。

茅場の言葉の最中に何故《手鏡》が必要だったのか——その瞬間には理解出来なかった。だがシリカの顔を見た瞬間、俺にも漸く理解出来た。何故ならその時、シリカの顔は最初にアイツが自身で創り上げたアバターとは違う顔——現実の顔だったのだ。その瞬間に俺の心を支配したのは”驚愕”と”理解”。二つの事実を、俺は改めて知った。

これが紛れも無い、もう一つの”現実”だと言う事を——。

「辛いよな、珪子………」

ほんの、ほんの数日前までのシリカは、何処にでもいる普通の子だった。ドジで泣き虫だけと優しいアイツの存在は、小さい頃からかけがえのないものだった。一度も鬱陶しく感じた事も無いし、嫌いと思つた事も無い。近所の人からは”仲良し兄妹”と昔から良く言われていた。

だけど今となっては………それも儚い”過去”。テレビや雑誌でこれでもかと言う程に掲載されていた”SAO”に二人揃つて興味を持ち、親父に無理言つて買つて貰つて来て、プレイした直ぐに——俺とシリカは、この現実（リアル）（SAO）の”囚人”となつてしまった。今現在の本当の”現実”では社会全体が大騒ぎになり様々なメディアが注目しているだろう。何故なら一つのMMOにより、一万人にも及ぶ人間が眠り続けているのだから。

それに……今頃親父や母さんはどうしているだろう。意識の無い蛻もぬけの殻の状態である俺やシリカの身体を揺さぶり、名前を呼び続けているのだろうか。それとも悲しみの余り泣いているのだろうか……。

「ッ……………!!」

途端に込み上げてくる、後悔と悲しみの念。それから逃げる様に俺は二つの拳を力強く握り締める。

「親父……母さん……ごめん、俺の我儘の所為でこんな事になって本当なら珪子までプレイさせるべきじゃなかったんだ。だけど俺は、それを強引に——!!」

目を瞑り、心中で謝罪の言葉を呟く。でも今更後悔しても遅いし、過去の事を悔やんでも後の祭りなのは理解している。だけど俺は咳くしか出来なかった。そうしなければ、俺は後悔の念に押し潰されそうになっていだろうから——。

とその時力一杯に握り締めていた手の上に、手の感触があった。ハッと目を開きその手の先を見つめる。其処にはベットに横たわったまま、顔を此方に向ける珪子シリカの姿があった。

「珪、子……………」

「お兄ちゃん、あたしは……………大丈夫だよ」

目を見開いたまま俺はシリカを見据える。シリカは更に、言葉を続けた。

「確かに、お父さんやお母さん、ピナや友達とも会えないのは凄く悲しい……………。この世界で”死ぬ”のも怖い。だけどあの後、お兄

ちゃんが一人で出て行った後、あたし———思ったんだ。”お兄ちゃんは、強いな”って」

上掛けを剥いで身体を起こし、俺の手を両手でしっかりと握り締める。

「あたしは目の前にある現実から目を逸らして”生きよう”としてるのに、お兄ちゃんはそれを受け入れて”生きよう”としてる。だからあたしも、ちゃんと受け入れて”生きよう”って思ったんだ」
「珪子……お前……」

その言葉に一切の迷いが無いのは俺にも分かった。だけど彼女の心にもきつとある筈だ、耐え難い”死の恐怖”が。だけど先程の言葉を聞いて、その恐怖に打ちひしがれている様子は全く無かった。俺はその恐怖に怯えているのだと踏んでいた為、驚きの表情を隠せなかった。

「それにね」付け加える様にシリカは呟く。「”友達”と一緒にだから、頑張れる気がするんだ」

「”友達”……？ まさか、友達でも出来たのか？」
「うん。私と同じ年くらいの———」

シリカが言い掛けた瞬間、バンツ！と後方の扉が開かれる。突然の出来事に俺とシリカはギョツとなり、すぐさま扉の方向に視線を向ける。

其処に立っていたのは———

「おいシリカ、戻ったぞー………ってあつ！ あん時のガリの兄ちゃんじゃんー！」

……先程会ったばかり、豪快且つ天衣無縫な女の子であった。

この豪快且つ天衣無縫なこの子の名は、《リベカ》。ばつちりとした丸い目と褐色肌が特徴的な女の子だ。因みに俺の予想通り、シリカと同年だそうだ。

シリカとリベカが出会ったのはつい先日ゲーム・スタートの事。昼時に突如言い放たれた”この現実の幕開け”により多くのプレイヤー達が絶望していた広場に、シリカは深夜一人で出向いたらしい。そして中央の噴水で一人落ち込んでいた際、とびっきりの笑顔でリベカが話し掛けて来たのだ。

当然最初は驚き同時に警戒したのだが、リベカは自分と同年くらいでしかも自身と同じ”女”であるプレイヤーに会えて至上の喜びを感じたのか、次から次へと話題を繰り出し話して来た様だ。それにより警戒や恐れも緩み始め、別れる時には既に”友達”になっていたそうだ……。

話を聞き終わった直後、俺は直ぐに口を開く。

「でも何か……ちょっと強引じゃないか？ リベカさんよ」

「強引だあ？ オレは別に女の子同士が直ぐに友達同士になるのは普通だと思うぜ？ まあそれに、その場に居なかったガリの兄ちゃんには関係無エだろ？」

「……それはそうだけどさ。ってか”ガリ”って言うんじゃないやねえよ」

「お、お兄ちゃん少しは落ち着いて……リベカちゃんもそう言わないで、普通に呼んであげてよ」

リベカの言葉に少々憤りを感じる俺を、シリカは優しく諭す。

しかし……まさか自分自身を”オレ”と呼称する”女の子”が
現実^{リアル}に居るとは。この様な性格をしている人物は大抵ゲーム内か、
空想上の物語に居るか居ないかと思っていたのに。

「……まあ性格が天衣無縫でがさつで豪快なのは置いといて、この
世界で”友達”が出来て良かったな、シリカ」

「うん。最初はびっくりしたけど、リベカちゃん……意外と優しい
から」

「意外ってのは余計だぜ。でもそう言って貰えると、何か嬉しいな」

鼻の部分を人差し指で擦りながら、ニカツと笑顔を浮かべるリベ
カ。恐らくシリカが彼女と友達となった理由には、このまるで太陽
の様に明るい彼女の性格も一つの要因として存在するだろう。この
様に男の子の様に明るく元気な少女は、現実^{リアル}でも結構珍しい。絶望
と不安に押し潰されそうだったシリカにとって彼女との出会いは衝
撃的であり、同時に一つの”救い”だったのかもしれない。

だが、一つだけ妙に思う事があった。

リベカがまるで太陽の様に明るい性格なのは認めるが……彼女
は”絶望”していないのだろうか？ この”偽りの現実^{SAO}”に閉じ込
められた事に恐怖と絶望を覚えたり、現実^{リアル}に残した大切な”家族”
と会えない事に深い悲しみを持つてはいないのだろうか。もしそれ
等を抱えているのなら、この明るく振る舞っているのは、その絶
望と悲しみを紛らわす為の一つの”強がり”ではないのだろうか。
彼女の言葉を聞き続ける内に、俺は自然とそう思い至る様になっ
ていた。

そして話が途切れた瞬間、俺はさり気無くその疑問をぶつけてみ
た。

「……所で、さ。如何してリベカはこの世界——SAOに閉じ

込められても尚、そんなに明るく居られるんだ？ 動揺したり絶望したりするのが普通だと思っただが」

「ん？ ああそんな事か。そりや最初は驚いたぜ？ 『クリアするのにすんげー時間が掛かるゲームをクリアしなければ出られない』ってどんなクソゲーだよ！ とか考えてたし」

此処に、この世界に捕われた事を” そんな事 ”の言葉で済ませたのは少々納得いかないが、恐らく彼女にはこの重大な事実をその言葉で片付けられる程の” 理由 ”があるのだろう。俺はそう決め付け、彼女の言葉に一切の口を挟まず聞き続けた。

「でもホントは、凄く嬉しかったんだ。現実とは違うゲームの世界でも、また…… 思いつ切り走れる事が出来るんだって」
「走……れる……？」

不可解な言葉に対し、シリカは言葉の真意を尋ねる。

「ああ、そうさ」腰掛けていたベットから立ち上がり、大きく伸びをした後にリベカは言葉を紡ぐ。

「オレ、さ。現実じゃ…… 両足義足なんだ、小っせえ頃事故っちゃって」

—— ” 思いつ切り走れる ”。その言葉の真意は、残酷で悲しい物。問い掛けたシリカは目を見開き、両手を口に当てる。俺も陰しい表情で彼女の顔を見つめた。

「そんな…… リベカちゃん、義足だなんて……！」

「ははっ、そんなに驚く事も無エだろ？ オレ以外にも義足して生きてる人なんて、オレの通ってる病院に一杯居るからな。それに別に義足でも普通に生活出来るし、生きて行ける。だけど…… 小さな

い頃のように思いつ切り走れないのが、何時も辛くてさ……………」

今まで自身に存在した足が消え、代わりに偽りの足が着けられる事は——とても辛かったのだらう。やや顔を俯かせるリベカの表情に、光は無い。

「だけど！」しかし突如として、顔を上げ先程までの明るい表情に戻ったリベカは、

「このゲーム——SAOには、ちゃんとオレの”足”がある。そりゃアバターの身体なんだけどさ、小さい頃外に出て走り回った感覚が…………無性に伝わってくるんだ。だからオレはゲームクリアの時までに一杯冒険して、楽しんで還ろうって考えてんだ！」

「リベカちゃん……………」

——この子は、強い。強い”心”を持っている。

彼女は絶望や恐怖に押し潰される事無く、寧ろそれを跳ね除けて生きている。

ただ”思いつ切り走れる”——その思いが、彼女の心の強さ。

「——強いんだな、リベカは」

自然と、俺は彼女に向けて賞賛の言葉を贈っていた。

彼女も俺に視線を向けて、ニカツと笑い返す。

「強くななんか無エよ。オレはただ、嬉しいだけさ！」

その言葉に苦悩も迷いも無い。あるのは純粹な”感情”。

その感情を支えとしてこの世界ゲームを生きて行ける彼女を、俺は多少

——羨ましいと感じた。

「それじゃ、此処でお別れだな」
「うん……………」

あれから数時間後。オレとシリカ、そしてリベカを加えた三人は、数時間にも及び様々な事を語らい続けた。その時のシリカは、満面の笑みを浮かべ続けていた。この世界に閉じ込められて常に悲しみの表情しか浮かべていなかったシリカに再び笑みが戻った事に、俺は心底喜びを感じた。これも全てリベカの御蔭だと、心中で感謝している。

そして今現在、俺達は街の北西ゲートの前に立っている。ゲートを背にシリカとリベカに身体を向けたまま、言葉を告げる。

「また暫くしたら来るよ。そんな時は何かお土産でも持って来るから、楽しみにしとけよ」

「うん。だけど無理して持って来なくていいよ。あたしは、お兄ちゃんが来てくれるだけで充分だから……………」

「おつ、嬉しい事言ってくれるねえ」

恥ずかしげに俯き呟く妹に対し、俺はクシャクシャとその頭を撫でる。現実^{リアル}でも良くこれをすると思われただが、今は嫌がっている素振りが無い。恐らく現実を思い出し、懐かしく考えているかもしれない。

シリカの頭をクシャクシャしながら、俺は視線を横に向けた。其処には暇そうなお表情を此方に向けている豪快且つ天衣無縫な少女――リベカが立っていた。

「——リベカ。シリカの事、頼んでも良いか？」

「んあ？ ああ良いぜ、カインの代わりに傍に居てやるよ」

「……有難う、本当に、助かるよ」

「気にすんなつて。オレとシリカは友達だし、友達が友達を支えるのは普通の事だからな。………つてかさ、ちよつと心配し過ぎじゃねえか？」

「うつせ。兄が妹の身を心配する事に、問題なんか無エよ」

「……ふーん」

何だか怪しく思われているが、兄が妹を心配する事は普通の筈だ。うん、きっとそうだ。そうに違いない。

一人心中で暗示を続けながら俺は、シリカの頭から手を離れた。俯いた顔が上げられ、シリカの瞳が俺の視界に映る。それを捉えながら俺は、静かに言葉を告げた。

「……じゃ、元気でなシリカ。リベカと一緒に、これから頑張れよ」

「うん……。あたし、頑張ってみる。リベカちゃんと一緒に、この世界で——”生きてみる”ね」

「ああ、それで良い。それで良いよ、珪子………」
シリカ

言つて、俺は彼女達に背を向け歩き始めた。このゲートを通り森を越えれば小さな村ホルンカがあり、その付近の森では俺の友人が——キリトが、一人で”生きている”。この数時間でキリトのレベルも1つや2つは上昇している筈だ。だったらすぐさま戻つて、追い越してやる。

暫く歩き続けた後、ふと背後を振り返ってみる。視線の先にはゲートの前に立ち小さく手を振るシリカと、大きく手を振るリベカの

姿。二人の手に連れられて俺自身も手を振った。

ほんの数時間だけだったが、シリカやりべかと過ごした時間は俺にとって”安息の時”であった。だが俺が行く先に待つのは”生と死の狭間”。自身のHPを削る死神が徘徊する大地に、俺は向かうとしていた。

ただ後悔は無い。迷いも無い。逃げた心算も無い。

何故ならこれが俺の決めた道^{レベル}。何時脱線してもおかしくないレベルの上を歩き続け、この世界で——”生き続ける”。

心に誓い、俺は再び視線を前方に戻すと共に走り出した。
まだまだ、俺の道は始まったばかりだ——。

「——あ、鍛冶屋行くの忘れた」

それを思い出したのはキリトと再び合流した直後。

無論、キリトから盛大に突っ込まれたのは言うまでもない……。

episode 8：一時の安息（後編）（後書き）

と言う展開の後編でした。カインマジスコ（ry
そして豪快且つ天衣無縫な女の子の名は『リベカ』です。今後はシリカの大切な”友人”として再び出て来ますよ〜♪

次回からはオリジナルの話に入ります。時系列は原作に沿い、その中でのカインの物語を書く予定です。また新たなキャラや原作キャラも出たりするかもです（え

ともかく次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価も大絶賛で待っております！ では、飛翔^{ジャン}！

PS；

果たして、義足はナーヴギアにちゃんとデータ化されるのだろうか
と小一時間。されなかったらリベカ歩けないよ………… or z

episode 9：無垢なる鍛冶職人

茅場晶彦によるSAOのゲームスタートから一か月後。死者は二千人にも及んだ。

死因は様々なのだが、多かったのはやはりモンスターとの戦闘での”敗北”だ。

このゲームは従来のMMOとは違い、かなりのリアリティがある。それは正に”本当の現実”の様な感覚があるのだ。故にモンスターが自身の命（HP）を奪うべく攻撃して様に、プレイヤー達の心は一瞬にして恐怖に染まり恐慌状態に陥り、反撃も逃亡もせずにHPをゼロにして、無残に消えて行く――。

《はじまりの街》に存在する黒鉄宮と呼ばれる建物の一室。其処はβテストの際は『蘇生者の間』と呼ばれていたそうだが、今では巨大な碑が設置してある。しかもその碑には一万人のプレイヤーの名前が刻まれ、HPがゼロになった者――即ち《死》を迎えた者は名の上に横線が刻まれ、同時に死亡時刻と死因が書かれるシステムになっている。シリカの様子を見に行く際に覗いているが、日に日に《ログアウト》して行った者達が増えて行く一方だった。

しかし一か月経って漸くプレイヤー達は”生きて還る”道を選んだ。一層が攻略された僅か十日後には第二層も攻略された。そう、絶望に圧されても尚俺達は、此処で”生きる”道を選んだのだ――。

その一か月の中で俺は、キリト共に行動していた。やはり元βテスターである彼の行動には無駄な部分が一切なく、またスキル系統・^{ポップ}モンスターの湧出場所・弱点部位等々、難しいゲーム攻略の為に必要な情報が載った分厚い攻略本の如く、彼の脳内にはありとあらゆる

る情報が存在していた。俺は彼からその情報を幾度も提供して貰い、一日も早くこの現実（SAO）で”生きれる”様に努力し続けていた。

そんな”大切な友人”とパーティを解散したのは、第六層に続く迷宮区が踏破された直後だった。

今まで彼とパーティを組み闘い続けた俺であつたが、時折妹——シリカの様子を見る為に下層へと赴いていた。その際には彼は俺の為を思い、俺が戻ってくれるまでちゃんと待っていてくれたのだ。最初は感謝していたが、ある時ふと思つたのだ。俺が——彼の”足枷”になつていてのではないかと。

俺がシリカの様子を見に下層へ赴き、元の層に戻つて来るまでに掛かる時間は最低でも数時間は及ぶ。この時間の中キリトは一人俺の帰還を待ち続けているとなると、かなりのタイムロスになつてゐるのは明白な事実。これが今後も続いて行くととなると、彼の道に^{レール}支障をきたすのではないかと、そう思い至つたのだ。

パーティを別れよう。俺が告げた時彼は一瞬驚いた表情を見せたが、彼は何の反論もする事無く承諾してくれた。疑問の言葉が反論が来ると覺悟していた俺にとって、それは”驚愕”の一言であつた。だが考えてみればきつと、彼は何時かはこう告げるであろうと予測していたのかもしれない。もしそうならば全く動じずに承諾してくれたのも納得がゆく。流星は元βテスター……とは関係無いか。

しかし幾らパーティを解散したからと言って、これまでの関係が音を立てて崩れ落ちた訳では無い。未だにフレンドリストには《Kiritō》の名がある。離れていても”友”である事に、変わりはないのだ。そう遠くしない内にきつとまた会える筈だ、きつと——。

episode 9：無垢なる鍛冶職人

2023年 4月22日 第十層主街区 《ウル》

この階層を構成するのは典型的な森や草原だ。しかし夜時になる^{エンカウント}と遭遇率が非常に高まり、主にウルフ系のモンスターが大量に湧出^{ポップ}する。また平原が階層の殆どを占めているので野宿出来る安全エリアも極僅かで、安全が保障出来る場所はこの主街区が挙げられる。街の内観は何処か西洋さを感じる。敷き詰められた石畳の上に立つ建造物の屋根は全て紅色。空中から一望すれば、きっと緑色の平原のど真ん中に紅の斑点がある様に見える事だろう。

施設等は他の階層と差異は無いのだが、この階層には特に《鍛冶屋》が多く存在している。大抵はNPCが経営する鍛冶場なのだが、中には宿屋の一室を借りてプレイヤー自身が経営する鍛冶屋——通称 《借り鍛冶場》と呼ばれる——がある。部屋には立派な炉があり、武器作製スキルを上げ続けるプレイヤーは此处で”露店”を開き、商売をしているのだ。

しかし特筆すべき所は何と言っても、この街の”雰囲気”だ。街を歩くと耳に響くのは鉄を打つ鎚の音と、NPCの勇ましい声。それは黄昏時まで続き、夜は一変として静寂全体が街を包み、薄明時になればまた町全体が動き出す——。この”動”と”静”を

感じる街に魅入られ、俺は現在のホームタウンとして此処を選んでいる。近い内に、下層で自身の”道”を歩んでいるシリカやリベカをレベル上げも兼ねて連れて来る予定だ。

そう言えば余談だが、シリカは何と自身の《使い魔》を手に入れたらしい。

捕まえたのは二月頃。何の情報も持たずに降り立った階層の森で一匹の小竜に遭遇したらしい。襲って来ると思っていたそうだが、その小竜はその様な素振りも見せずに逆に近寄って来たらしい。その際リベカがシリカの為に買ってやったナッツをその小竜にあげるとソイツは大喜びしたそうだ。……その幸運を俺にも分けて欲しいと思ったのは余談である。

そして付けた名が『ピナ^{リアル}』。俺は直ぐに「ああ、やっぱり」と感じた。何故ならこの名は現実で俺達家族が飼っている一匹の猫の名なのだ。シリカは——珪子は小さい頃から何時もピナと仲良くじゃれ合っていた為、この牢獄と化した世界で姿形も全く違う一匹の竜にそう名付けたのは、十分納得出来た。

それ以来シリカはリベカと共に積極的にフィールドに出て、冒険している。友人の存在と自身の”ペット”の様な存在が出来て、アイツにも”生きる”希望が芽生えたのであろう。それは兄として本当に嬉しい事だ。……最近アイツからのメールが減ったのは少し悲しいが。

「ふああ………つと。さて、今日はどうすっかなあ」

部屋の扉から出た俺は大欠伸を口から放った後、今日一日をどう過ごすかを迷う。平原に出て湧出するモンスターを黄昏時まで狩り尽くすのも良いし、これよりも更に上の層で狩るのもまた良い。或いは、シリカの下へと行くのも良い。腕を組みうーん、と一人唸る。

そう唸り続けながら階段を降り出入り口に向かおうした時、ふと視界に映る一人の”少女”の姿。

「え、えっーと……………これで良い、のかな？」

何かの木札を持ち、扉の前で一人首を傾げる髪留めをした黒髪の少女。確かあの部屋は——《鍛冶場》があつた筈だ。

俺も割と最近に知つた事だがこのSAOでは宿に泊まる以外にも、民家の二階を借りて生活する事も可能だ。当然金が必要となるのだが、値段は普通の宿屋の値段と殆ど差異は無く、加えて風呂や複数部屋だつたりもするので結構お得なのだ。尤も、肝心の二階を貸し出す民家は極僅からしいが。

そして《借り鍛冶場》もその類に当て嵌まる。使用条件や使用料等があるらしいが、この《ウル》には借り鍛冶場が幾つもある。

この宿屋もそうなのだが、どうやら此処の鍛冶場は使用料金が安い代わりに鍛冶場の状態が悪いらしい。俺は二階の宿屋を利用していただけだが、此処の鍛冶場を利用しようと来たプレイヤーは、此処を定宿に決めてから一度も見掛けてはいない。大抵が良い鍛冶場ある宿屋へと行ってしまふのだ。

今眼前に立つ少女はそれを知っているのか否か……………もし知っていて此処を利用するのならば、他の借り鍛冶場は他の誰かに先取りされ、唯一残つた此処を頼りにして来たのかもしれない。

俺は困っているかもしれない少女に、思い切つて声を掛けてみた。

「よお、何か困つて——」

「ひゃあ!？」

「うおあ!？　び、びつくりした……………」

何の前触れも無く放たれた彼女の大声に驚き、俺は大きく仰け反つてしまふ。流石に背後から声を掛けたのは不味かつたかもしれない

い…………。

「あ…………えと、な、何か私に御用でも……………？」

「あ…………うん」

告げる少女の視線が俺の顔に突き刺さる。どうも突然声を掛けた俺に警戒心を抱いているのか、少々視線が痛い。その視線から逃れようと視線をずらした時——ふと彼女が持つ木札の方に目が行った。木札に何か文字が書かれている様だが、彼女の手によって全てを読む事は出来ない。だが最初の”O”と最後の”D”の文字で分かった。

文字は英語で”OPEN D”——それが指すのはつまり、

「——店、開くのか？」

「あ…………は、はい」

気恥ずかしそうに頷く彼女。やはり此処に店——と言っても露店だが——を構えるつもりだったのか。

しかし…………そうなると”意外”だ、この様な”少女”が鍛冶に興味を持ち露店を構えるとは。だが其処は個人の問題。他者がとかく言うのは本人も悪いだろう。

「だったら、ちょっと寄って行こうかな」ニツと口元を緩ませ、
「丁度、武器を換えたいと思ってたからな」

「えと、武器を……………ですか？」

「おう。とびつきり高性能な槍を、な」

「あ…………その、まだ準備が色々とあつて、まだ武器は……………」

「そうか…………なら研磨を頼む。耐久値ギリギリなんだな」

呟くと共にメニューウィンドウを開き、一つの”槍”をオブリジェ

クト化する。現出したのは紅色の柄が特徴的な槍で、固有名は《レッドスピア》。訳せば”赤の槍”と言った所か。

この両手槍あいはつと出会ったのは5層での亜人型モンスターを撃破した時だった。威力は十分なのだが反面、肝心の耐久値が低いのがネツク。手洗い扱いをすれば一瞬にしてポリゴンの塊となりて爆砕するだろう。故に必要以上の点検と手入れが必要なのだ。鍛冶場が多く展開しているこの街をホームタウンとした要因の一つでもある。

「研磨なら……大丈夫、です……」
「そっか。なら頼むよ」

俺の言葉に少女は小さく頷くと、足早に部屋の中へと入って行った。

——あの子、初めてなんだな。接客とかそう言うの。確たる自信はあった。敬語を使っではいるが、客である俺に對しての気遣いやサービスが無い。加えて商売で大切な”笑顔”もない……この現実SAOで初めて、商売をやっているのだろう。例え鍛冶スキルが高くてもこの調子では、固定客が出来るのに時間が掛かるだろう。

「って、何で俺が心配してんだか」

下らない思考を振り払い、動いていない身体を解す為に大きく背伸びをする。そして一通り解した後メニューウィンドウを開き、最前線で宝箱から手に入れた転移結晶の個数やボーションの手持ちを確認した後、壁に凭れ掛り開かれた出入り口の扉の向こうに視線をやる。

この宿屋兼借り鍛冶場は中心街の路地裏にひっそりと佇んでいる。中央広場や目抜き通りには立派な鍛冶屋が幾つも並んでいる為、此

処のような地味で目立たない場所が人で埋まる事はまず無い。だが逆に、安い宿屋や借り鍛冶場を利用して露店商売をしている職人プレイヤーが多いのはこの路地裏でもある。僅かな金で一夜を過ごそうと考える者や、NPCの鍛冶屋と比べると質は落ちるが比較的安価である事に着目し、職人プレイヤーに武器作成を依頼する者達も少なからず存在している。

視界の先には、この宿屋の前を通り過ぎるプレイヤーやNPCの姿がちらほらと映るだけ。何ら変わった様子は無いのだが――ふと視界に入った、向かいの路地。光が差し込まぬ程に狭い路地に、一つの影があった。

フードを被っていた為顔までは視認する事は出来なかったが、そのプレイヤーの容姿は視えた。頭の中から足のつま先まで伸びる漆黒のローブを纏い、その所々に蒼の刺繍が入っている。まるでRPGで良く見掛ける魔導師の様な、或いはもっと殺伐とした――

「お、お待たせしました」

とその時、扉が開かれる音と先程の少女の声が耳に響いた。視線を彼女の声が聞こえた方に移すと、困惑した表情のまま俺の《レツドスピア》を両手で大事そうに携える少女が立っていた。

再度扉の向こうの路地に目を向けた時にはもう、ローブの男の姿は消えていた。一体何故あの様な場所に、しかも俺を見るような形で立っていたのかは度し難いが……今は思案する必要も無いか。「サンキュー」彼女に対して礼の言葉を述べると共に、凭れ掛つていた壁から身を離す。「で、いくら？」

「えっと……百コルに、なります」

「百コルね。あいよ」

ポケットに入れておいた百コル銀貨を取り出し、それを指でパチンと弾く。銀貨は宙を幾度も回転し、やがて少女の手にストンと落ちた。

「あ、有難う御座います！」

「はいはい。んじゃ、俺はこれで……………」

ドロップした時同様の輝きと耐久値に戻ったレッドスピアをアイテムウィンドウに格納し、俺は彼女に背を向け出入り口に歩を進める。

だがふと、出入り口から出た直後に背後を振り返ってみる。視界には先程の少女が映っているのだが、溜息を吐き胸に手を押し当てている。如何やら慣れてない接客をして、緊張していたのだろう。そんな彼女を見つめていた時、無意識に言葉が口から放たれた。

「……………そんなに緊張しなくても、良いと思うぜ？」

その声には彼女はビクツと反応して此方を見たが、構わず言葉を続ける。

「俺は別に敬語とか気にしない性質だし、第一そんなガチガチだとそっちがキツイだろ？ もっと気楽にやってみると良いさ……………肩の力抜いて、な」

その言葉に対して彼女は何の反応も示さなかったが、俺は「じゃな」と言うと共に手を振り、再度振り返った後歩き始めた。それ以降は振り返らず、大通りの方へと歩を進めるのであった……………。

「氣樂にやれ、か……………」

一人になった少女はポツリと、先程のプレイヤーが告げた言葉を口にする。

まだ準備段階なのだが、直に彼女が経営する事になる鍛冶屋の初めての客が彼であった。内容は武器の研磨と言う簡単な内容であったが、彼女はそれでも緊張していた。

小さい頃から夢見ていた”店の経営”。しかし街のまだ15歳の彼女に接客やサービスの仕方等、到底分かる筈も無かった。もし失敗すれば怒鳴られてしまうのではないか……………その思考が余計に彼女に緊張を与え、初めての客に対して満足な対応をする事も、儘ならなかった。

しかしどうにか研磨は上手く行き、彼から何の非難も浴びる事も無かった。押し掛かっていた緊張から解放され、胸を撫で下ろしていた際に——先程のプレイヤーから放たれた、”助言”アドバイス。

「そう言われても如何したらいいのか……………はあ……………」

幼き頃から抱いていた”夢”と”現実”の違い。彼女は——リズベツトは生まれて初めてそれを味わい苦悩する。大きくため息を吐いた後、彼女はゆっくりと自身の——本当は借りているのだが——工房がある部屋へと足を踏み入れるのだった。

episode 9：無垢なる鍛冶職人（後書き）

今回はツンデ…………ゲフンゲフン、SAOのヒロインの一人であるリズの登場回でした。

このリズは原作での”露店商売”をしていた頃になります。故にまだまだ接客やサービス面に難がある状態です。怒鳴ったりはしてませんがw

また今回あった《借り鍛冶場》と言う設定は、とある先生に相談して考えたオリジナル設定となっております。

SAOでは、色々な街の施設を借りれる為——民家の2階を丸々貸してくれる、と言う話もあったそうなので——、”宿屋の一室に工房もあり、貸し出している”と言う形で考えました。……………自信は無いのですが（汗

また今回出た黒ローブのプレイヤーは……………次回までの秘密です（え

ともかく次回も読んで頂けると幸いです。

感想や評価也大絶賛で待っております！
では、飛翔^{ジャンラ}！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3228w/>

ソードアート・オンライン ～天翔る竜騎士～

2011年10月27日10時07分発行